

I. シンポジウム記録

『映像による日本語教育』

——第11回 異文化間教育学会——

日時：平成2年5月26日（土）午後2時～5時

場所：放送教育開発センター ホール

司会

放送教育開発センター所長：加藤秀俊

東京外国語大学助教授：佐久間勝彦

NHKインターナショナル理事：三宅 進

（現在：国際メディア・コーポレーション
国際ネットワーク事業室室長）

国立国語研究所日本語教育指導普及部長：西原 鈴子

放送教育開発センター助教授：福田 滋

加藤所長：お手元の資料に十分記載してございますから、これ以上なにも申し上げる必要はな
かろうと思っておりますけれども、日本語という一つの言語の学習者、ならびに潜在学習者の数は世
界的に増える一方でございます。既に関係者の方はご存知かも知れませんが、NHKで
は、1、2年の内にNHK版のスタンダード日本語教材というのを制作にとりかかるといった
ようなお話も伺っておりますし、いくつかの機関、団体、学会などが、映像による日本語教授
法というのを模索してここ数年動いてきたこともご承知のとおりでございます。そこで、その
中から代表といたしまして、三つの団体でお作りになった日本語教育教材を見ていただいて、
それからその制作、あるいは出演、企画に携われた方々にご報告をいただくことにいたしま
す。時間配分としましては、一団体につきまして、ビデオの上映も含めて40分ぐらいを目安に
して、合計およそ120分、ほぼ2時間を使います。そして最後の1時間ぐらいを討論というふ
うに考えております。それでは、ここに書いてございます順序に従いまして、まず国際交流基
金。これは十分ご承知と思っておりますけれども、外務省、文部省、そして民間の基金を集めまして、
かなり広範な国際交流、文化交流活動に専念しておられる団体でございます。それから、2番
目は、NHKインターナショナル。こちらは、NHKの関連団体でありまして映像を通じて国
際活動をなさっておられます。最後に、私ども放送教育開発センターが最も縁が深く、そして
常にお手伝いしている放送大学。この三つの機関から、ご報告をいただくことにいたします。
それでは順序に従いまして、国際交流基金における日本語教育、東京外語大の佐久間先生から

ご報告を頂くことにいたしましょう。よろしくどうぞ。

佐久間助教授：外語大の佐久間でございます。国際交流基金が、企画制作した海外向け日本語教育番組についてご紹介します。お配りしましたプリントの最初の1ページをちょっとご覧いただきたいんですが、「概要」というところです。70年代後半からでしょうか、海外から、海外で放送するテレビ日本語番組を提供してほしいというような要請が国際交流基金などに寄せられておりました。これに応えまして、国際交流基金は、プリントの「制作過程」というところの3番目ですが、1980年に企画を開始致しました。実は、その当時、私は、国際交流基金の日本教育関係のスタッフとして、その起案に当たっておりました。その後10年間、ずっとこれに関係しております関係で、今日ここで紹介させて頂くことになったのだと思います。1980年に企画が始まりまして、その後、1983年に、番組の中で素材として使用するミニ・ドラマといいますが、我々はそれをスキットと呼んでいますけれども、スキットが完成しております。

そのスキット、1話から13話の小さなドラマなんですけど、これを、番組の中に織り込みまして、26回分の30分番組を作りました。これが、1985年に完成しております。26回分といえますのは、放送の単位で、1年間52週、週1回で52回、1年分、それを4で割って、13という単位をワン・クールというのだそうで、完成した26回分というのは、週1回のペースで放送した場合に、半年間放送できるという数ですが、これが1985年に完成したわけです。なお2年前の1988年には、後半で使うビデオスキット（後半の13話）が完成して、現在、その番組化が企画中でございます。

私の持ち時間は40分間なんですけど、口頭の説明を少なくして、できるだけビデオそのものをお見せする時間を多くとりたいと思っております。2回に分けてビデオをご紹介するのですが、先ほど申し上げたように、一つの30分番組の中で使う中心素材としてのミニ・スキット、これが最初に完成しておりますので、まず最初に、1983年に完成したミニ・ドラマの一部をご紹介したいと思います。プリントの1ページのいちばん下のほうの、「1983年から」というところに、「素材としてのスキットの使用」と書いてありますが、これは、素材を提供してもらえば番組は自分達の国で作れる、という国での使用です。その例として、韓国や中国をあげることができます。とくに韓国の場合は、その典型的な例と言えます。できたばかりのミニ・ドラマを13本、国際交流基金が韓国のKBSに送り、韓国で、それを1年間分とか半年分の、日本語教育用の番組に構成して放送したわけです。つまり、素材の提供という形です。それでは、最初に、海外で放送することを前提に、できるだけ現代的な日本を紹介しようじゃないか、そして自然な日本語で、それも、できればあまり暗い感じではなく明るい雰囲気 드라마にしよう、ということで制作したビデオスキットをごらんいただきたいと思っております。多少、単純なキャラクターであるというような批判も後には出たんですが、13本あるミニ・ドラマの一番最初の第1話だけをご紹介したいと思います。その後で、それを使った番組構成等についてお話を進めていきたいと思っております。それでは、最初の1話だけご覧ください。6分間程度です。

■第1話 ヤンです。どうぞよろしく。

①成田新東京国際空港 到着ロビー

アナウンス 日本航空15便は、ただいま17番ゲートに到着しました。

[加藤と息子の太郎が入ってくる。加藤、到着標示を指す]

加藤 あ、あれだ。

アスウンス “Japan Air Lines Flight 15 now arriving at gate 17”

[ヤンが姿を見せる]

女性の乗客A ヤンさん、どうも。じゃ、お元気でね。さよなら。

女性の乗客B さよなら。

ヤン さよなら。

女性の乗客A・B Have a nice day.

加藤の声 あ、ヤンさん。ヤンさん。

ヤン あ、加藤さん。

加藤 やあ、いらっしゃい。

ヤン 加藤さん、しばらく。

加藤 や、や、ようこそ。ヤンさん、太郎です。

太郎 はじめまして。太郎です。

ヤン ああ、太郎さんですか。

太郎 はい。

ヤン ヤンです。どうぞよろしく。

太郎 よろしく。

加藤 さあ、行きましょう。太郎、車。

太郎 はい。

加藤 これ(お願いします)。いい(で)すね。

女の声 ちょっと。

[女性の乗客Cがヤンの荷物を拾い、近寄ってくる]

女性の客C これはあなたのですか。

ヤン あ、はい、わたしのです。どうもありがとうございます。

女性の乗客C いいえ。じゃ。

[ヤンと別の乗客の手押車がぶつかり、二人の荷物が散乱してしまう]

ヤン あ、どうもすみません。

乗客 こちらこそ。どうも。

[ヤン、荷物を拾おうとして、今度は女性の乗客Cの手押車にぶつかる。彼女の荷物も散乱してしまう]

女性の乗客C ああ。

加藤 ああ、どうもすみません。

ヤン どうもすみません。

加藤 おい、太郎。これ。

太郎 はいはい。

加藤 これはヤンさんの荷物ですか。

ヤン ええ。あ、(こ)れはわたしのです。

加藤 ヤンさん、これは。

ヤン あ、それもわたしのです。

女性の乗客C あら、これはわたしのではありません。

ヤン じゃ、これはだれのですか。

加藤 あ、これはわたしのです。これはあなたのですか。

乗客 はい、わたしのです。あ、どうもありがとうございます。

加藤 いやいや、どういたしまして。

ヤン あれっ、これはわたしのではありません。

女性の乗客C あ、それはわたしのです。

[ヤン、荷物を女性の乗客に渡しそこねて、中身があたりに散乱してしまう]

女性の乗客C あっああ。

ヤン ああっ。どうもすいません。

太郎 どうもすみません。

② 走る車の中で

ヤン この車は太郎さんのですか。

加藤 いいえ、わたしのです。

ヤン 日本の車ですか。

加藤 ええ、そうです。

太郎 ヤンさん。

[太郎、後ろの方を指さし、ラジオのスイッチを入れ、アンテナをたてる]

ヤン 加藤さん、あれは何ですか。

加藤 え、どれですか。

ヤン あれですよ、あれ。あのビル。

加藤 ああ、あれは団地です。

ヤン 団地。

加藤 ええ、全部住宅です。

ヤン へえ。

③ 加藤家の玄関と居間

[車が加藤家の前に止まり、チャイムが鳴る]

みどり お母さん、早く、早く。

加藤夫人 ああっ、みどり。

[加藤夫人、みどりのエプロンはずさせる]

みどり おかえんなさい。
夫人 おかえりなさい。
加藤 さあ、ヤンさん、どうぞ。
夫人 どうぞ。
ヤン はい。失礼します。
夫人 さ、さ、どうぞ。
〔夫人、ヤンを居間に通す〕
加藤 ヤンさん、家内です。
夫人 はじめまして。どうぞよろしく。
ヤン はじめまして。ヤンです。
みどり あたし、みどりです。どうぞよろしく。
ヤン みどりさん。よろしく申し上げます。
〔ヤン、みどりにおみやげを渡す〕
みどり ああ、どうもありがとうございます。
加藤 おお、ああ、よかったね。
〔ヤン、夫人にもおみやげを渡す〕
夫人 どうも。
加藤 さあ、ヤンさん、どうぞ。
〔加藤、いすを勧める〕
夫人 どうぞ。

4 和室

夫人 お待たせしました。はい、みどり。
〔夫人、運んできたすしを、ヤンの前に置くようみどりに渡す。一同、歓談をする〕
加藤 そいじゃあ、ヤンさんの来日を祝して、乾杯しましょう。
一同 かんぱーい。

〔第1話 おわり〕

(国際交流基金制作『ヤンさんと日本の人々』シナリオから)

佐久間助教授：以上が一番最初の、第1話です。ご覧になっていかがでしょうか。これは、普通の中学校の英語の教科書とか、それから日本語教科書の第1課に普通ある、「これは何ですか」や、「私は〇〇です。」に当たる、日本語の「……は……です」という構造が提出される、伝統的な第1課ですね。その文型といいますか、表現を織り込んであるスキットなんですが、スピードが速いためにそれがどこにあったのかわからなくなってしまうこともあります。ご覧の通り、ヤンさんという国籍不明の外国人が主人公になっています。これはあのう、制作意図にそれがあって、プロダクションの方に外国人を主人公にしてビデオを作ってくれと頼みますと、白人を、つまり、肌の白い白人を持ってきがちなんです、我々のねらいとしては、そうではなくて、外国人というのをもっと広くとらえよう、日本人じゃないようだけれども、出身

国を特定できないような外国人を主人公にしたかったわけです。参考資料の10ページを開いていただきたいんですが、これは国際交流基金からでております『教師用指導書』の部分なんですが、「楽しいスキット」という見出しがあります。ちょうどそのページの真ん中ぐらいになるところです。「スキット全体は、タイトル「ヤンさんと日本の人々」が示す通り、ヤンという外国人を主人公にして、スキットの中心に置き、彼が東京で新しい生活を体験していく中で、年齢、職業などの異なる様々な日本人と出会うという構成」、これが全体の構成であります。そして、前後して申し訳ございませんが、2ページに戻ってください。このミニドラマが完成したのが1983年ですから、もう7年前になります。その時に完成したのが、この2ページの「構成内容」というところにある第1話から第13話ですが、このようなスキットが、13話完成しました。実は、2年前に、右側にある14話から26話までが完成しているんですが、これはまだ、放送番組としては構成されておられません。スキットそれぞれの内容を象徴的に表す見出しといいますかタイトルをご覧いただくと、ヤンさんシリーズの全体のストーリーの流れが何となくお分かりいただけるかと思います。実はこれを教室でも使っていただいているわけですが、今までに、あちこちからいろんな意見が寄せられています。

制作のねらいとしてあった「楽しさ」とか「自然さ」とか「現代性」というものは、だいたい、そのように受け取られているんですけども、一部には、主人公ヤンの性格に好感が持てないとかですね、ヤンがコミカルに子供っぽく描かれすぎてて存在感がないとかですね、それから、ヤンがお客様扱いされすぎている、日本での外国人の生活が美化されてる、ヤンが接する日本の世界が裕福すぎるといような意見が出されています。しかし、日本語教材に、こういう文句がつけられたということも、めずらしいんじゃないかと思います。それを私は、善意といいますか、都合よくこんなふうには解釈しています。それは、我々が、文型といいますか、日本語の文法であるとか語彙を織り込んで作った教材を、学習者や教授者の皆さんが、教材以上のものとして見てくださっている、ということです。つまり、内容について、非常に大きな関心を払ってくださったということです。それは、ねらいとしてあったことですが、学習者が自分の日本語が十分でなくても、こういうものがある種のドラマとして楽しみたいというふうを考えてくれるということは、教育をする側といいますか、教える側、それから学ぶ側の双方にとって、大きな意味があることだと思うんです。

そして、もう一つ、強調したいことがあります。今ご覧になった皆さんは、ほとんどがネイティブスピーカー、それから、よく日本語のおできになる外国の方だと思うんですが、これをですね、もし仮に、日本語でなくて、モンゴル語であるとかですね、それからアラビア語であるとか、それかスウェーデン語であるというような言語で見たときにどうだったろうか、とお考えいただきたいんです。私はモンゴル語は全然わかりませんが、これがモンゴル語であったとしても、だいたいのストーリーを言うことはできると思うんです。これが、実は、印刷教材としての教材と全く違うところじゃないかと思うんです。

印刷教材の場合には、かなり易しく書かれていても、最初の1課というものは文字が読めなければ全くわからない。ところが、これが映像教材で流される時には、分かったような気になる。これも、一番最初の外国語学習の動機付けのためには非常に有効に働くことが多いんじゃないかと思います。小さなお子さんが、一歳、二歳、三歳のお子さんがですね、アニメの漫画

などを見て、語彙や表現が難しいために内容が理解しにくくて悩むなどというのは見たことない。必ず何らかの方法で、自分が楽しむのに必要な情報を得ているんじゃないでしょうか。外国語教育における映像のそれもストーリーのある映像から入るといふことのメリットについては、これからも十分研究されていていいんじゃないかと思っております。それから今、2ページ目を開いていただいているわけですが、どちらかといいますと、「ヤンさん」の前半13話というのは、明るく裕福な世界が舞台になっています。先程出ました加藤さんの家というのは、実はこれ田園調布にありまして、外務省の参事官のお宅かなんかを借りて撮ったんで、初め我々が考えた普通のサラリーマンの加藤さんのイメージとははるかに、ずれてしまいました。ヤンさんが接する人々の生活が豊かすぎるという批判が出てくるのも十分理解できます。

そして、資料2ページの右の方にある14話以降は、ヤンさんの住む場所を田園調布から向島とか墨田区荒川のほうに移しまして、隅田川のほとりに持って行ったんです。住むところも立派なアパートではなく、一間といいますか、ワンルームみたいな部屋です。同じアパートに住んでる家族は四大家族で二間に住んでいる。そして、その家族の主人は長距離トラックの運転手なんですが、そんな人々を、「ヤンさんと日本の人々」の「人々」の中に含めているわけです。また、大学に行けなかったことを悩んでいて、働きながら独学で勉強して大学受験の準備をしているような青年も登場させたりしています。それから、日本に住む外国人の生活を美化し過ぎていないかというような指摘に関しては、ヤンさんに病気をさせてみたりですね、失恋を味わわせてみたり、おでん屋で酒を飲み過ぎて隣にいるお客さんに絡んで怒鳴られる、そんな経験もヤンさんにさせています。このような形で「ヤンさんと日本の人々」というスキットができあがったわけですが、あとでビデオそのものを見ていただこうと思います。その他、参考にしていただきたいことについては、ワープロの打ち間違いなどが多いんですが、ここに資料として用意しましたので、後でご覧いただけたら幸いです。ここで、ひとつコメントしておきたいんですが、その4ページ目をちょっと、ご覧ください。このスキットのですね、特徴の一つとして「現代性」ということを謳っています。もう、7年前にできたんですから、現代性といっても7年前、その当時の新しいものを取り入れたつもりです。

従来日本の紹介といいますと、奈良とか京都とか、お琴とか文楽とか、そういうものが中心になることが多かったのですが、ヤンさんシリーズでは、4ページの1番上に書いてありますように、朝の満員電車とか、夕方の商店街、それから観客が熱狂する夜の川崎球場とかですね、それから、秋葉原の電気街、その後、渋滞する高速道路、歩行者天国、「続ヤンさん」になりますと、六本木のディスコとかカラオケなどが紹介されます。日本的なものは何かというのは実は難しいと思うんですが、たとえば、年末にベートーベンの第九を、これほど多く、演奏する国はないんだそうで、確か、暮だけでも毎年百何十回やるそうですが、これなど「日本的」と言えるかもしれません。そこで、「墨田第九を歌う会」による「五千人の第九」年末の題材として取り上げられています。以上が、素材としてのスキットについての話ですが、このスキットの前半の13話を使いまして、26回分の30分番組を構成したわけです。それについては、資料の6ページからです。その30分番組、レッツ・ラン・ジャパニーズ・ベーシック・ワンについての基本的な、方針なんですが、これは、今日これから紹介される他のプログラムと、いろんな点で違ってくるはずなんですが、その一つは、視聴者といいますか、この番組を見る人が

外国にいるということを前提にしているという点です。

たとえば放送大学の場合には、視聴者の主体は日本にあるのかもしれませんが、国際交流基金の番組は、日本では放送できないという制限さえあり、海外でしか放送できません。そして、主として視聴者が、日本を知らない、日本をよく知らない、日本語を知らない外国人であるということです。一週間に30分です、そして半年間もしくは1年間、時には忙しく見られないということもあるでしょうから、そういう人達がこの番組を見ていて日本語が上手になるということを期待するのは無理だと思うんです。ですから、この番組のねらいというのは、実は、日本についての興味を持たせたり、それから日本語学習についての動機を与えるというような、そういうところにとどめるべきだろうと、考えられました。

フィードバックのない一方的な放送、それも視聴者層を特定できない、どこの国のどの地域で放送するかもわからない、英語圏で放送するという事だけはわかっているけれども、どこで放送するかわからない、そして、13才の中学生から70才のおじいさん、おばあさんのような方々も見てらっしゃるんですね、現に。ところがそれは、初めから予想されたわけで、ですからそういう意味では、むしろいろいろな人々に興味を持って見ていただければ、それで一つの役割は果たせるだろうというようなところにねらいがあったわけです。そういうことですので、すぐに日本に行って日本語を使うというようなことではありませんので、実用性ということ进行全面に押し出してはおりません。むしろ、楽しくただ見ていただければというように考え、ビデオというメディアの特性を活かして、できるだけ説明を少なくして、自然に近い言葉の言語場面、それをなるべくいろんな形で、バリエーションを提示するという、ビデオの持つ機能を生かそうじゃないかというような点が強調されました。会話場面のバリエーションは、スタジオ・スキットといいますが、スタジオでゲストが行うミニ・スキットというものを織りまぜて構成することにしました。

次に、7ページをご覧いただきたいと思います。7ページに、その1回の30分番組がどのように構成されたかが書いてありますけれども、一つのスキットを2回の番組で使いますので、13話のスキットが全部で26課分の、つまり26回分の放送になるということになります。以上が、だいたいの説明ですが、最後に、全体26回分の放送のですね、ちょうど中間当たりにある第15課、この30分番組の中の16分間ぐらいをご紹介します、どんなふう構成したかということだけ、おわかりいただければと思います。

ここに、1回分の番組の構成について書かれていますけれども、英語のネイティブ・スピーカーの講師を説明役としまして、他に性別とか年齢などのバランスを考えて3人の日本人のアシスタントが登場します。基本的には、まず、その課で扱うスキットが最初に見せられます。スキットのストーリーを確認して、それから、スキットの中で学習してもらいたい部分の提示があります。説明を加える場合もありますし、その他に、同じ表現を使った別の会話場面、言語資料といいますがそれをスキットふう提示します。一番最後に、またそのスキットを見せるんですねけれども、今日お見せするのは、前半をちょっと過ぎたあたり、番組開始後16分程度の部分です。番組の中では平仮名などの文字の指導も少し行うんですねけれども、今日ご覧いただく部分には含まれておりません。

今回は、さっきお見せしたようなスキットの番組の中での利用のし方、テレビという映像メ

ディアの特性を活かして、会話場面をしつこいほどたくさん提示しようとした点などをご覧いただきたいと思います。テレビは、普段、教室でしようとしてもなかなかできないことをいとも簡単にやってくれるということがありますので、番組を作るときは、この点が大切だと思います。

それでは、この後16分ほど見ていただきますと、もう私に与えられた時間はおしまいになると思います。26回分の中の1回分さえ全体はお見せすることができず、半分だけしかご紹介できないということはたいへん残念なんですけれども、だいたいこのようなものが、現在もアメリカやハワイ、カナダそれからフィリピンなどで放映されているというようにお考えいただければありがたく存じます。それでは、第15課の後半の方の16分間をご覧いただいて、私のお話を終わらせていただきます。

2. ヤンさんスキット

解説

ヤンさんと
日本人々

Yan and
the Japanese People

Hello, everyone. I'm Mary Althaus.
Today we're ready for the eighth installment of our skit about Yan. I think today's story will give you some of idea how the Japanese live in the summer.

シナリオ 第8話 全篇
「ああ、つめたい。おいしいですね。」

ヤンスキット
第8話 要約

(OFF)
Did you understand what that was about?

(OFF)
Our story today began with Yan taking some souvenirs he'd gotten in Takayama to the Suzukis, from whom he rents his room. Takayama is a small mountain village almost exactly in the center of Japan. But although it's a small place, Takayma is famous for the wood carving which has thrived there since old times. After that Yan went to Akihabara, a famous district in Tokyo where there are countless electrical appliance shops and where electrical goods can be bought at big discounts. After getting what he wanted very cheaply. Yan took a bath at the Katōs' house, and we saw him there in the tub, singing Japanese songs in high spirits.

Now, let's get right into our lesson for today Do you remember this scene from the skit?

3. い形容詞 [ヤンスキット／解説／ミニスキット・形容詞①～④／練習
／解説 「熱いですなあ。」「そうですね。』]

<p>ヤンスキット部分 第8話 ① 大家さんの 縁先</p> <p>画面ストップ</p>	<p>鈴木夫人「いらっしゃい。」</p> <p>ヤ ン 「おじゃましています。」</p> <p>夫 人 「麦茶をどうぞ。」</p> <p>夫 人 「あ、ありがとうございます。<u>ああ、冷たい。</u> <u>おいしいですね。』</u>＊</p> <p>*くり返し</p>
	<p>Yan was drinking <u>mugicha</u>, barley tea, a popular thirst quencher which the Japanese seem to consume almost by the gallon in the summer time. It is served chilled and is very refreshing. Now, what did Yan say after drinking it? Watch once more.</p>
<p>画面ストップ</p>	<p>鈴木夫人「いらっしゃい。」</p> <p>ヤ ン 「おじゃましています。」</p> <p>夫 人 「麦茶をどうぞ。」</p> <p>ヤ ン 「あ、ありがとうございます。<u>ああ、冷たい。</u> <u>おいしいですね。』</u>＊</p> <p>*くり返し</p>
<p>解説</p>	<p>Did you notice that what he said contains two separate sentences?</p>

<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px;"> <p>1) Aa, tsumetai!</p> <p>2) Oishii desu ne.</p> </div>	<p>(OFF)</p> <p>ヤ ン 「ああ、冷たい。おいしいですね。」*</p> <p style="text-align: center;">*くり返し</p> <p>The first words that passed his lips after taking a sip were “Ah, it’s cold!” Then turning to Mrs. Suzuki, who had given him the drink, he said, “It’s delicious!”</p>
<p>ヤンスキット部分 第8話 ① 大家さんの 縁先</p>	<p>ヤ ン 「ああ、冷たい。おいしいですね。」</p>
<p>解説 い形容詞</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px;"> <p>1) Aa, tsumetai!</p> <p>2) Oishii desu ne.</p> </div> <p>練習・形容詞 杉原、海宝、タオルを持ち、 広げてみせる。</p>	<p>As you have probably realized, both <u>tsumetai</u> and <u>oishii</u> are adjectives. Do you remember our practicing adjectives before, though it was many lessons back, I admit.</p> <p>海 宝：これは大きいタオルです。</p> <p>杉 原：これは小さいタオルです。</p> <p>When we practiced adjectives before, each one was followed by a noun. We had, for example, “a big towel ” and “a small towel.” But the adjectives Yan used were in a slightly different pattern. Watch this.</p>

ミニスキット・喫茶店

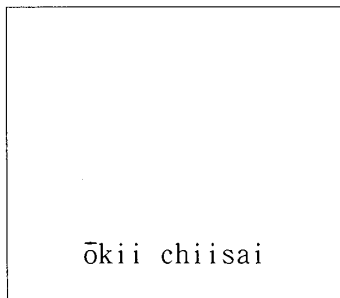
杉原、海宝、喫茶店にいる。

峰、ケーキを運んでくる。

杉原、海宝のケーキをうらやましそうに見て。

海宝、自分のをさし出してとりかえる。

杉原、海宝のケーキを見て。



練習・形容詞

峰、杉原、バーベルを挙げる。

杉原の 写真	峰の 写真
karui	omoi

峰 : お待ちどうさまでした。

杉原 : それ、大きいですね。

海宝 : どうぞ。

杉原 : ありがとう。

それ、小さいですね。

杉原 : 大きいです。

海宝 : 小さいです。

海宝 : 大きいですね。

杉原 : 小さいですね。

峰 : 重い、重いですね。

杉原 : 軽いですよ。

峰 : 重いです。

杉原 : 軽いです。

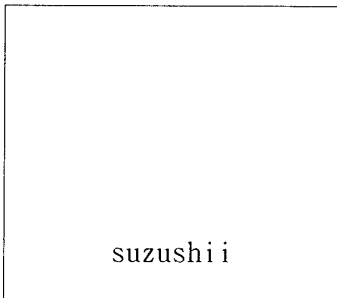
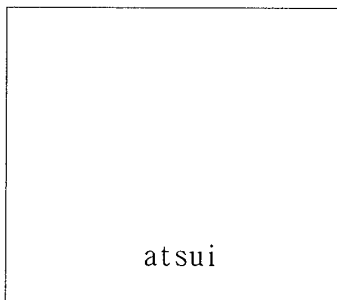
峰 : 重いです。

杉原 : 軽いです。

ミニスキット・扇風機

海宝、スーツ着用、扇風機が回っていない。

杉原、扇風機を回す。



ミニスキット・喫茶店

海 宝：暑い。ああ、暑い。

杉 原：暑いですか。

海 宝：はい、ちょっと暑いですね。

海 宝：ああ。涼しい。とても涼しいです。ありがとう。

杉 原：暑いですか。

暑いですか。

海 宝：とても涼しいです。

とても涼しいです。

They used a lot of adjectives, didn't they? Were you able to guess what they meant?

杉 原：それ、大きいですね。

海 宝：どうぞ。

杉 原：ありがとう。

それ、小さいですね。

ōkii

chiisai

ōkii chiisai

First of all, when she was comparing the size of the desserts, Sugihara-san used the words for “big ” and “little, ” didn’t she? The words for “big ” or “large ” is…

杉 原：大きい・大きい

(OFF)

And the word for “small ” is…

海 宝：小さい・小さい

Just the use of a single word like this would convey the meaning, “It’s big, ” “It’s small, ” and so on, but when a person wants to convey this meaning to a listener, he usually adds desu ne, which makes his utterance politer.

海 宝：大きいですね。

杉 原：小さいですね。

Let’s go on to the adjectives used in the next scene.

練習・形容詞

	omoi
--	------

karui	
-------	--

karui	omoi
-------	------

峰 : 重い、重いですね。

杉原 : 軽いですよ。

It's obvious what these words mean, isn't it? The word Mine-san used means "heavy."

峰 : 重い・重い

(OFF)

And the adjective Sugihara-san used means "light."

杉原 : 軽い・軽い

When one person is speaking to another, he will probably use these adjectives like this with desu.

峰 : 重いです。

杉原 : 軽いです。

The first sentence means, "It's heavy" and the second, "It's light." Now, let's go on to the third scene. What adjectives were used in it?

ミニスキット・扇風機

杉 原：暑いですか。

海 宝：はい、ちょっと暑いですね。

海 宝：ああ、涼しい、とても涼しいです。
ありがとう。

Here you heard the adjectives meaning “hot ” and “cool. ” The word for “hot ” is…

	atsui
--	-------

杉 原：暑い・暑い

And the word for “cool”, as in cool weather or cool air, is…

suzushii	
----------	--

海 宝：涼しい・涼しい

well, to be sure that you’ve got the feel of the difference between adjectives without desu, in the plain form, and adjectives with desu. Watch this once more.

ヤンスキット部分

第8話 ① 大家さんの
縁先

鈴木夫人「いらっしゃい。」

ヤ ン 「おじゃましています。」

	<p>夫 人「麦茶をどうぞ。」</p> <p>ヤ ン「あ、ありがとうございます。ああ、冷たい。 おいしいですね。」</p>
<p>練習 い形容詞</p>	<p>OK, then, let's practice and see if you can put these adjectives to use.</p> <p>(OFF)</p> <p>Compare the size and tell me whether these pandas are large or small. All right, how about this panda, is it a big one or a little one? Tell me in Japanese.</p> <p>杉 原：大きいです。</p> <p>大きいです。</p> <p>Then how about this one, is it big or little?</p> <p>杉 原：小さいです。</p> <p>小さいです。</p> <p>解説「暑いですなあ。 ／そうですね。」</p> <p>Got that? Then let's look next at this.</p>
<p>ヤンスキット部分 第8話 ① 大家さんの 縁先</p>	<p>鈴 木「あ、ざぶとんをどうぞ。」</p> <p>ヤ ン「あ、ありがとうございます。」</p>

	<p>鈴木「毎日、暑いですなあ。」*1</p> <p>ヤン「そうですね。」*2</p> <p>*1、*2くり返し</p>
<p>解説「暑いですなあ。」 「____ですね。」</p> <div data-bbox="178 703 520 999" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>1) Mainichi <u>atsui</u> <u>desu nā</u>. 2) So desu ne.</p> </div> <div data-bbox="178 1097 520 1393" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>1.) Mainichi atsui ... desu na. 2.) Sō desu ne. ...</p> </div>	<p>In their final exchange, you heard another example of an adjective plus <u>desu</u>.</p> <p>峰(OFF) : 暑いです。 暑いです。</p> <p>峰(OFF) : 毎日、暑いですなあ。</p> <p>(OFF) We've come upon this word <u>atsui</u> before. Do you remember what it means? That's right, "hot." So the sentence marked 1) means, "It's hot every day, isn't it?" The word <u>na</u> at the end is about the same as <u>ne</u> and is used to appeal to Yan for his agreement.</p> <p>Unlike <u>desu ne</u>, however, <u>desu na</u> is used mostly by men, and by older men at that, so it's not really an expression that most of us should use.</p>
<p>ヤンスキット部分 第8話 ① 大家さんの 縁先</p>	<p>鈴木「毎日、暑いですなあ。」*1</p> <p>ヤン「そうですね。」*2</p> <p>*1、*2くり返し</p>

<p>解説「そうですね。」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>1) Mainichi atsui desu nā. 2) Sō desu ne.</p> </div>	<p>Well, when Mr. Suzuki said to him that it was very hot every day, what was Yan's response?</p> <p>ヤ ン(OFF) 「そうですね。」</p> <p style="padding-left: 100px;">「そうですね。」</p> <p>This is used to show agreement, or to suggest one's sympathy for what the other person has said. It is perhaps the most commonly used sentence in all Japanese, so do learn it.</p> <p>Now, let's find out about another sort of expression with adjectives. It appears in this scene</p>
<p>4. い形容詞の過去形 [ヤンスキット／解説 「暑い (です)」「暑かった (です)』</p>	
<p>ヤンスキット部分 第8話 ① 大家さんの 縁先</p>	<p>鈴木夫人「<u>ヤンさん、高山も暑かったですか。</u>」* 1</p> <p>ヤ ン 「<u>ええ、昼間は暑かったですね。</u>」* 2</p> <p style="text-align: center;">* 1、* 2 くり返し</p>
<p>解説</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>Yan-san, Takayama mo atsukata desu ka?</p> </div>	<p>While the Suzukis and Yan were talking about Takayama, Mrs. Suzuki asked Yan if it was hot there, too.</p>

Yan-san,
Takayama mo
atsukatta desu ka?

杉原(OFF) : ヤンさん、高山も暑かったですか。

暑かったですか。

暑かったですか。

(OFF)

Yan answered that it was hot during the daytime.

Ee,
hiruma wa
atsukatta desu.

海宝(OFF) : ええ、昼間は暑かったです。

暑かったです。

暑かったです。

Ee,
hiruma wa
atsukatta desu.

(OFF)

It's this form atsukatta that we want you to learn next. Watch and listen once more.

ヤンスキット部分
第8話 ① 大家さんの
縁先

鈴木夫人「ヤンさん、高山も暑かったですか。」 * 1

ヤン 「ええ、昼間は暑かったですね。」 * 2

* 1、* 2 くり返し

解説

Atsui desu ka?
Atsui desu.

Atsui desu ka?
Atsui desu.

Atsukatta desu ka?
Atsukatta desu.

Atsui desu ka?
Atsui desu.

Atsukatta desu ka?
Atsukatta desu.

You have already learned "Is it hot?" in Japanese. Now we want you to learn "Was it hot?" Let's compare and see what has to be changed in order to express this difference in meaning

杉 原(OFF) : 暑いですか。

峰 (OFF) : 暑いです。

杉 原(OFF) : 暑いですか。

峰 (OFF) : 暑いです。

杉 原(OFF) : 暑かったですか。

峰 (OFF) : 暑かったです。

杉 原(OFF) : 暑かったですか。

峰 (OFF) : 暑かったです。

(OFF)

What's different? Yes, the adjective atsui has changed to atsukatta.

atsui

atsukatta

suzushi i
suzushikatta

suzushii desu
suzushikatta desu

This is an easy form to make. Just drop the final i and add katta instead.

Well then, can you form the adjective that means “was cool” ?

杉原(OFF) : 涼しい。

峰 (OFF) : 涼しかった。

杉原(OFF) : 涼しいです。

峰 (OFF) : 涼しかったです。

OK? Then let's see another example of a past adjective which was used in the skit.

(国際交流基金制作

『ヤンさんと日本の人々』シナリオから)

加藤所長：はい、ありがとうございますごいました。ご質問もたくさんおありかと思えますけれども、3つの番組それぞれに個性を持っておりますので、ご報告をずっと続けていただいて、ご質問、コメントなどは、最後にまとめてという方式を取らせて頂きます。それでは、続きまして、NHKインターナショナルの三宅理事から、ご報告をいただきます。

三宅理事：こんにちは、NHKインターナショナルの三宅でございます。私は、今日のテーマの日本語教育ということに関しましては、全くの門外漢でございます。一方、そのテーマにくっついている映像ということにつきましては、NHKに入りましてから、ちょうど今年で三十年になりまして、その間ずっとテレビ番組の制作に直接、間接に関わりまして、給料を貰ってまいりましたので、一応こちらの方は、逃げ隠れ出来ないという立場でございます。但し、私は直接自分で語学講座の番組を作ったことは、今までございませんので、やはり何も知らないといった方がいいのかもしれませんが。従いまして、こういうアカデミックな場所にお招きして頂いて、お話をするという事は、大変恐れ多いことではございますが、とにかく、番組をご覧頂いて、ご説明の補足をさせていただくという立場で、ご理解を頂きたいと思えます。

弁解がましいことは、これくらいに致しまして、早速ビデオを観て頂こうと思えますけれども、今年の秋、9月からでございますが、中国の放送大学で日本語講座が開設される予定になっております。これは、英語に次ぐ、二番目の外国語講座でございます。大変期待をされております。この講座のためのテレビ番組の制作について、日本側が様々な協力と援助を行ったわけではございますけれども、そのプロジェクトのまとめ役と申しますか、番組制作の仕事のお手伝いも含めまして、私ども、NHKインターナショナルがそれをさせていただきました。

これからご覧頂きますのは、その第1学年用の第10課のダイジェストでございます。講座は、毎回50分なのでございますけれども、今日は時間の関係もありまして、それを20分くらいに縮めて編集致しました。それでは、VTRスタート、お願い致します。

——中国語説明——

司会者（中国人講師）：みなさん、こんにちは、では今日も頑張りましょう。

伊集院：みなさんこんにちは、伊集院礼子です。今日も日本語の勉強、一緒に致しましょう。

——中国語説明——

A：この色はどうですか。

B：ちょっと地味じゃないですか。

A：そうかしら。じゃ、これはどうでしょう。

B：色はいいけど、ちょっとデザインがね。

A：そうねえ。じゃ、あれはどう。

B：派手過ぎるんじゃないかなあ。

A：はやりバーゲンでは、無理ですね。

B：ええ。じゃ、専門店へ行きましょうか。

A：そうしましょう。

——中国語説明——

この色はどうですか。

ちょっと地味じゃないですか。

——中国語説明——

この色はどうですか。

——中国語説明——

そうかしら。じゃ、これはどうでしょう。

——中国語説明——

そうかしら。

——中国語説明——

A：あのう、スーツが欲しいんですが。

B：お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

A：これどうかしら。

C：うーん、悪くありませんね。無地だともっといいですね。

B：あちらにもございますから、ご覧下さい。

A：こちらのは、おいくらですか。

B：はい8万5千円です。

C：ちょっと高いですね。

B：では、こちらはいかがでしょう。お安くなっております。

A：でも純毛じゃないでしょう。

B：はい、混紡ですが、ウール85%ですから。

A：そうですね、じゃ、それにしましょうか。

B：どうも有難うございました。

——中国語説明——

A：あのう、スーツが欲しいんですが。

B：お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

A：これどうかしら。

C：うーん、悪くありませんね。無地だともっといいですね。

B：あちらにもございますから、ご覧下さい。

——中国語説明——

司会者：それでは、伊集院さんお願いします。

伊集院：あのう、スーツ欲しいんですが。

あのう、スーツ欲しいんですが。

お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

これどうかしら。

これどうかしら。

悪くありませんね。無地だともっといいですね。

悪くありませんね。無地だともっといいですね。

あちらにもございますから、ご覧下さい。

あちらにもございますから、ご覧下さい。

——中国語説明——

伊集院：あのう、スーツ欲しいんですが。

あのう、スーツ欲しいんですが。

お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

——中国語説明——

お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

——中国語説明——

**が欲しい。

**が欲しいんですが。

——中国語説明——

欲しいんですが。

——中国語説明——

A：あのう、スーツが欲しいんですが。

B：お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

A：これどうかしら。

C：うーん、悪くありませんね。無地だともっといいですね。

——中国語説明——

あのう、スーツ欲しいんですが。

あのう、スーツ欲しいんですが。

お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

お客様がお召しになるんですね。どうぞこちらへ。

これどうかしら。

これどうかしら。

悪くありませんね。無地だともっといいですね。

悪くありませんね。無地だともっといいですね。

——中国語説明——

司会者：では、お願いします。

伊集院：はい。

りんご、りんご。

りんごが欲しいんです。

腕時計が欲しいんです。

腕時計が欲しいんですが。

——中国語説明——

伊集院：こちらのおいくらですか。

ちようと、高いですね。

A：こちらのおいくらですか。

B：8万5千円です。

C：ちょっと、高いですね。

B：では、こちらはいかがでしょう。お安くなっております。

A：こちらのおいくらですか。

B：8万5千円です。

C：ちょっと、高いですね。

——中国語説明——

こちらのおいくらですか。

こちらのおいくらですか。

これどうかしら。

——中国語説明——

司会者：**だと、もっといいんですが。

——中国語説明——

司会者：ではまた。

伊集院：それでは、さようなら。

三宅理事：ご覧頂きました番組は、中国放送大学日本語講座の第1学年の第10課のダイジェストでございました。28というような数がでておりましたが、放送回数は、第10課の中でも三つ位に分けて放送しますので、第10課のこの回は、最初から数えますと、第28回目の放送になるということでございます。第1学年のこの講座は、全部で27課ございます。その第10課でございますから、大体1/3位というところになるわけですがけれども、学習のレベルとしてはどの程度のものか、ご覧頂きました印象は如何でございましたでしょうか。今のビデオを補足的にちょっとなぞっておきますと、私どもが便宜的にAスキット、Bスキット、Cスキット、と呼んでいる3種類のスキットと、先生の解説、およびアナウンサーのモデル・リーディング、このような要素から成り立っております。Aスキットは寸劇形式の、いわゆる会話スキット、Bスキットは練習用にAスキットを分解したもの、Cスキットは「日本一瞥」という日本紹介のミニ・コーナーでございます。解説のほうは、重要文型を中心にして語彙、文法、発音などを重点的に取り上げて説明と練習を行っております。インストラクターは上海復旦大学の徐祖琮副教授、モデル・リーディングをしておりますのはNHKの伊集院礼子アナウンサー、またこの番組のスキットの台本の執筆者は北京大学の孫宗光教授でございます。ビデオに沿ったお話はこの位に致しまして、この中国放送大学の日本語講座の全体的な枠組みについてご説明をしたいと思っております。お手元に、簡単な説明書がございますけれども、一応お話で分かるようにご説明をしたいと思っております。

中国放送大学、正式には中央広播電視大学といいますが、このラジオ・テレビによります大学は1978年に設立されまして、現在60万人ほどの学生が学んでいるということござい

ます。現代の中国社会では、中堅指導者の養成が急務といわれておりまして、そうした社会的要請に大規模に応えていける教育組織として放送大学に対する期待は非常に大きいといわれております。その中国放送大学では人文科学、社会科学、自然科学のさまざまな教科を教えていますけれども、外国語の講座としては従来は英語があるだけでございました。そこでこれにも一つ新たに外国語の正規の科目を加えようと中国の関係者の間の検討が数年にわたって続いた末、私どもにとってうれしいことに日本語に決着致しまして、今年1990年9月から英語に次ぐ第2番目の外国語として日本語講座を開講する計画が固まったわけでございます。

NHKインターナショナルは、そのような検討の途中でもいろいろと相談に乗りながら実現に向けて協力を続けて参りましたが、一昨年、昭和63年の春に中国放送大学から正式に援助と協力を求められました。中国側はさらにその年の6月、国家教育委員会から日本政府に対しまして、このプロジェクトに対する援助の正式要請を提出致しました。私どもは、この事業が中国における日本語学習の振興、日本語の普及に大きな効果をもたらし、相互理解促進の願ってもないチャンスと考えまして、外務省を初めとする関係機関、また私どもの親元であるNHKとも鋭意協議を進めました。その結果、外務省、国際交流基金による資金援助の見通しがつき、NHKからも国際協力の一貫として全面的に協力するという位置づけを得ることができました。おそらく中国全土で20万人もの学生がやがて受講することになるだろうという、ビッグ・プロジェクトであり膨大な経費がかかりますので、政府や公的資金に加え、民間の企業や財団からも寄付を仰ぎました。

そうした動きと並行しまして、中国側では日本語講座の教学大綱、すなわちカリキュラムの策定作業が始まりまして、日本の専門家の協力のもとに教科書の執筆も進んで行きました。教学大綱の作成とか、教科書の作成など、印刷媒体に関係する部分では、国際文化フォーラムという財団法人の支援、協力も得ました。そして、昨年2月には待望の第1学年の会話スキットの原稿が中国から日本に送られてきてまして、平成元年の春3月から日本語講座の制作を始めたいわけでございます。これが大まかないきさつでございますが、次に中国放送大学日本語講座の枠組みと内容のあらましをご紹介します。おきたいと思っております。

この日本語講座は2年間で履修するものでございます。1年目は基礎篇で50音の学習から始まります。2年目のほうは、科学技術、旅行、外国貿易と三つの分野に分けて日本語を学習させます。しかし、これも専門分野の専門的な日本語を学ばせるというのではなく、基礎日本語の一貫として位置付けられているということでございます。

放送による授業は先程申しましたけれども、1回50分です。第1学年では毎週3回の放送で、テレビが2回、ラジオが1回の割り振りになっております。年間では、40週というふうに分けられておりますから、第1学年ですと、テレビは80回、ラジオは40回、合計120回の授業ということになります。第1学年の基礎篇は全部で27課から成り立っているわけですが、第1課から第3課までは、50音の発音と平仮名・片仮名の読み書きそしてアクセントの勉強でございます。その次から、会話を主体にした勉強が始まり、第4課では「挨拶」、第5課では「学校訪問」、以下「出迎え」「買い物」「電話」「誕生日」「アルバイト」「引っ越し」などと続きまして、第26課は「就職」、そして第27課は「農家の手伝い」という題名になっております。専門的な言い方は私は知りませんが、とにかく各課ごとに場面を設定して、短いドラマ

形式の会話スキットを作り、これを軸にして文型や語意を取り出して練習し覚えさせ、必要最小限度の文法的解説も加えていくという行き方をとっております。専門的には機能シラバスというのでございますか、言葉の機能の面を重視した行き方をしているというふうに聞いております。第2学年になりますと、科学技術、旅行、外国貿易の三つの分野についてそれぞれ20課ずつ、どの分野についてもテレビ40回、ラジオ40回の放送となる予定でございます。この辺のデータはお手元の資料にあると思います。枠組みと大まかな内容は以上のようなふうになっております。

初めにも触れましたように、これは正規の大学教育でありますので、教学大綱すなわちカリキュラムは、中国の国家教育委員会が組織した専門家の委員会で策定され、教育内容についての責任と決定権は当然、中国側の方にあります。しかし、テレビによる日本語教育についてのノウハウは、中国側にはまだ十分にはありませんし、日本語教授法の新しいアプローチもぜひ取り入れたいという中国の方の強い意欲もございまして、日本の専門家や、テレビ番組の制作者との会議も数回重ねまして、日本側のアドバイスが十分生きる体制を作って取り決めました。第1学年用のテレビ番組の制作は、この4月に、おかげさまですべて完了致しました。

実際の制作体制についていいますと、会話スキット、練習用スキット、それに「日本一瞥」という日本紹介スキット、このすべてを日本側で制作致しました。さらにこれをもとにスタジオで解説を加えまして、アナウンサーの模範朗読も入れて放送用の完成番組を作る作業があったわけですが、1学年全部で80本のテレビの完成番組のうち、その半分をまず日本で作りまして、残りの40本を北京の郊外にある中国放送大学のスタジオで制作いたしました。出演者は両方とも同じメンバーで通しておりますので、東京での制作には中国人の解説者が来日し、北京での制作のためにはNHKの女性アナウンサーが2カ月間北京の方へ出張致しました。スタッフのほうは日本での制作分については、ディレクターも技術さんも全部日本人で行いました。

ただし、やがて中国で行われる同じ作業が円滑に進むように、研修を兼ねまして、中国放送大学のスタッフを3回に分けて日本に招きました。ディレクター、技術要員はもとよりですが、美術のデザイナーも、それから文字発生機といひまして字幕を電氣的に処理する機械を操作するオペレーターの研修も致しました。また、中国での制作作業は今年の2月初めから2カ月をかけて行われましたけれども、その際NHKからディレクターと技術のベテランが2カ月間びったり張り付いて指導したほか、私どもNHKインターナショナルからもスタッフを派遣して支援協力を努めました。

以上、中国放送大学の日本語講座の概要についてご説明をしたわけですが、この中国放送大学の日本語講座は中国における日本語教育、とりわけ映像による日本語教育の中でどのような位置付けになるのでございましょうか。ここで少し話を広げまして、中国では映像による日本語教育がどのような状況にあるのか、ごくかい摘まんで触れておきたいと思っております。

広い中国のことでございますからローカル・テレビの日本語講座がいくつかあると思っておりますけれども、全国放送の、日本語のテレビ講座番組は今のところ二つでございます。いずれも全国ネットを持つ中央テレビ局、CCTVといひますが、中央テレビ局が制作し放送している番組でございます。まず、中国で最も早く始まった日本語講座、「日曜日の楽しい日本語」という番組があります。これは上級向けの日本語講座です。それから初級の日本語講座、「標準日

本語」という番組がございます。これは昨年の秋から始まったばかりのものですが、この番組が始まる前には、日本語を学ぼうという初級講座が5年間放送されておりました。そしてこの秋から放送大学の日本語講座が始まるというわけでございます。既に数年間の実績を持つこのCCTVの二つの番組は、映像における日本語教育を語る上でいくつかの示唆を与えてくれるように思いますので、また、時間があれば後程紹介させていただこうかと思っておりますけれども、ここではその番組を担当している中国スタッフに聞いた話のうちで印象に残ったことを一つ、二つご紹介致しまして、私のまとめとしたいと思います。北京で会いましたCCTVの2人の日本語講座の担当者は口を揃えてこうっておりました。

「テレビによる日本語講座の長所は、生の日本語に触れられることもさることながら、現実の日本の生活や文化を目で見知り、理解できることなのです。中国で日本語を学んでいる人は、直に日本人を見たこともなければ、日本人に会ったこともないという人のほうが多いのです。たとえ日本語を習っても、また日本語を話せるようになっても、日本には一生行けないという人も少なくないでしょう。テレビ講座には放送回数を多く確保できないという悩みがあり、それに比べればラジオの日本語講座は、毎日朝、昼、晩と1日3回も繰り返して放送されますから、ラジオの方が学習効果が上がるという人もおります。しかし、映像を通じて日本そのものに直接触れ、画面で日本が見えるテレビ番組の強みは、やはり何物にも代えがたいのです。」

と、まあ、こういうふうなわけです。こんなことは言われるまでもないことかも知れませんが、北京のCCTVの狭くくしいVTR編集室で、仕事熱心な中国人の担当者からこの言葉を聞いたとき、私には深く共感するものがありました。また、標準日本語の担当者は、実際に会話スキットのロケを行い、日本語講座のテレビ番組を作った経験からこんなことも言っておりました。すなわち、「既にできあがってしまった活字の教科書を映像化するのはたいへん難しい。特に日本でのロケを実際に体験してこのことを痛感した。」と言うんです。テレビのスキットにふさわしい会話や場面設定と活字で教えるのに効果的なそれとは、いろいろと違いがあることを彼らも気づいたのだと思います。

この担当者の感想は、テレビによる日本語講座を制作する上での重要なポイントを言い当てていると私は思いました。つまりテレビにはテレビの作法といいますか、言い替えればテレビ独特の文法、とでもいうべきものがありまして、なかなかやっかいなものだということだと思います。すなわち、文章としてその会話あるいは解説の完成度が如何に高いものであっても、テレビの場面作りや俳優が演技をする上でしっかりこないものは、結局のところ映像による講座番組にはふさわしくないということだと思います。活字の文章、ラジオの会話、テレビの会話、それらそれぞれ1つ1つの間の取り方が違いますし、リズムも違っております。活字を読んで見た時にはいきいきとした会話だったのに、テレビ用に映像化して見たら、なぜか間の抜けた魅力の無いものになってしまったということも良くあることだと思います。こういう映像独特の文法というものが当然あるのだと思っておりますけれども、残念なことに私どもNHKでも、語学講座番組については必ずしもまだ、その映像独特の文法というものが確立されておらず、せいぜいのところ通常のテレビ制作の手法でお茶を濁しているか、制作者のセンスと経験上のノウハウに頼って、それで良しとしているというのが現状のように思います。

NHKには、確かにテレビ、ラジオの語学講座が非常にたくさんありまして、その制作の歴

史も長いんですけども、ベテランの担当者に今回改めて尋ねてはみましたが、やはりノウハウの理論化やマニュアル化はまだできていないということでした。まして、日本語講座に関しましては、先程加藤先生からご紹介がありましたけれども、NHKも本格的な取り組みを始めようとしている、まだその段階でございます。私は、ダイレクト・ティーチングの実績を十分咀嚼した上で、学者・教育者の方たちと映像制作者との本当の意味での相互理解と信頼に裏打ちされた共同作業が、どうしても必要な段階に来ていると思っております。そうした共同作業が日本語教育に大きな成果を实らせる可能性を強く感じておりますので、今日は先生方のお話をよく聞いて、映像に関わる私どもの今後の仕事にとりましても、貴重な栄養源にさせていただけるのではないかと期待しておりますので、とりあえず以上でございます。どうもありがとうございました。

加藤所長：ありがとうございました。これは、まだ放送されていない番組ですね。今年の9月から放送される番組のいわば、プレビューのような性格のもので、私ども、恐らく最初に拝見する機会を持つことが出来た僅かな人間達だと思います。次は、放送大学で、昨年度からですか、放送が開始されました在日外国人を主なターゲットにした番組、西原さんと福田さんとお二人にご報告を頂きますけれども、これは現在すでに我国で放送中の番組ということです。先程申しましたように、ご質問その他は、三つ見比べて頂きますと比較論的に、色々面白い問題が出てきようかと思っておりますので、それでは、続いて放送大学の番組についてご報告を頂きます。

西原部長：では放送大学の番組について、ご報告致します。最初にこの番組のサンプルを20分ほど観て頂くんですが、予め、お断りしなければいけないのは、実はこの番組を観て頂くにつきましては、ここには多分、アルフォンソ先生というメイン・キャラクターの方がいらっしゃるべきで、アルフォンソ先生のパーソナリティと申しますか、持ち味、またはスタイルというものを抜きにしては、この番組の特徴というのは存在しないのでありますけれども、残念なことに、今日、ご都合が悪くということで、こちらにはいらして頂けなかったものですから、私が代わってご説明申し上げるということになります。

今、加藤所長からご紹介頂きましたように、これは、先年度、平成元年4月から、開講しております。放送大学は、先年度から二学期制になりましたので、既に二学期分を放送し終えて、今は三学期目と申しますか、平成二年度分を放送中ということでございます。これは、放送大学の大学の番組でございますが、放送大学の正規学生にならなくても、この講座だけを選択して取ることが出来ます。外国人の場合には、それを正規な単位として取ったということは認められますので、それをどこかの大学にトランスファーと申しますか、単位を移すということも申請すれば可能になるような仕組みになってはおりますけれども、それを使って放送大学の卒業の単位とするというようなレベルまでは、番組そのものが及んでおりませんので、その点は、まだ未解決ということになっております。選択科目としてオープンにしておりますので、日本人でもとれるわけです。

面白いことに、後程申し上げる、期末テスト、それから通信添削問題等をみますと、結構日本人が登録していらっしゃるまして、これはどういう事なのであろうかと、時々疑問に思った

りするわけですが、そういう事も可能、つまり18才以上であれば、誰でも大学の単位として取れるようになっております。今はジャパニーズⅠとジャパニーズⅡと2科目同時に出ておられて、2つを平行して取っている人もいます。各課が15課、15週からなっております、ジャパニーズⅠが15課ジャパニーズⅡが15課ということになっているわけです。今日先ず観ていただきますのは、そのうちのさわり集でして後でご発表下さる福田ディレクターが、まとめて下さいました。それは、解説なしにいきなりシーンが変わってしまうんですが、一番最初に日本語のⅠの方の第5課の導入部分、及びアルフォンソ先生のそれに対するご説明の部分が出て参りまして、その後今拝見した「日本一瞥」に当たるザ・フェイス・オブ・ジャパンというのがありまして、ジャパニーズⅠの方に出て来るザ・フェイス・オブ・ジャパンの第5課の部分をお見せすると思います。それからジャパニーズⅡの方に移りまして、第3課の1部分をお見せし、最後にジャパニーズⅡのザ・フェイス・オブ・ジャパンですね、ちょっと性格が変わるんですけども、映像が20分になるところまで、ということで、切って観て頂こうと思います。先ずそういうような進行だということをお断りしておきます。それを観て頂いた後から私も説明を加えさせていただきます、それから制作担当の福田ディレクターから詳しいお話をして頂くということになると思います。では、どうぞ、映像をご覧になって下さい。宜しくお願いします。

——英語説明要旨——

(西原)

みなさん今日は。先週は「一て型」のことを勉強しました。もうマスターしたことと思います。自分の勉強していることが意味のある事として把握できるようになる、あるいは町で日本人の話していることが分かるようになるのは素晴らしいことですね。今日はアルフォンソ先生が「どこに何があるか」を表現するにはどうすればいいかお話し下さいます。

(アルフォンソ)

「どこに何があるのか」というのは、日常生活の中でひんぱんに用いられる表現です。英語では「駅がある」「花子がいる」のような区別はしませんが、日本語では、「物」の場合は「ある」、「生物」の場合は「いる」を使います。

また「——は」が「どこですか」に先行します。「は」と「が」の区別については、いずれくわしく説明します。まず次の会話を聞いて下さい。

- A：この写真は、山の上から取りました。
B：山の下に村がありますね。
A：ええ、神社もあります。その村へ、祭りを見に行きました。
B：その村で、祭りがありますか。
A：ありますよ。夜、その村に泊まりました。
B：その村に旅館がありますか。
A：ありません、小学校に泊まりました。
B：レストランがありますか。
A：レストランもありません。でも、酒屋はあります。

B：酒屋はどこにありますか。

A：この小学校のそばにあります。

B：小学校のそばですか。それはいけませんね。

A：子供達は、構いませんよ。この子ども達を観て下さい。

B：へえー、男の子と女の子がカメラを見ていますね。先生は、どこにいますか。

A：僕のそばにいますよ。

B：花子さんも、由美さんも子供と一緒に並んでいますね。でもジョンさんは、どこにいますか。

A：ジョンさんは、酒屋へビールとジュースを買いに行きました。

B：その村はどこにありますか。

A：群馬県です。

アルフォンソ：駅はどこにありますか。

駅はどこにありますか。

駅はどこですか。

駅はどこですか。

子供はどこにいますか。

学校にいます。

——英語説明——

(アルフォンソ)

今日勉強することの第1は「どこ」という単語の使い方です。それから場所を示す「に」という助詞があります。「で」は動作の行われる場所を示す助詞です。

それから、はじめて「が」が出て来ます。「が」についてはこれから何度もでてきますから今全部理解できなくても大丈夫です。

今日のキーワードは、人および動物の存在をあらわす「います」と物の存在をあらわす「あります」です。

The Face of Japan

(アルフォンソ)

日本ではあらゆるところで漢字をみかけます。看板など街のあちこちで目につきますが、一番典型的には何と言っても本の中にある漢字に圧倒されるでしょう。

日本文化はすべて漢字で書かれています。日本人は過去において色々な外国の要素を取り入れましたが、固有の特性を失うことはありませんでした。漢字を抜きにしては日本の生活も文化も理解することはむずかしいでしょう。漢字はあなたがたにとって新しい世界への門口となると思います。

Japanese II

(西原)

みなさんこんにちは、日本語の時間です。

先週は時間的経過を表現することを勉強しました。しかし私達は忙しくて一度に2つ以上のことをしなければならぬ事がよくあります。

今日は同時に進行することがらをどう言い表わすのかについて勉強しましょう。

(アルフォンソ)

今日のレッスンのタイトルは、「生きる限り希望がある」ですね。英語で while はよく使われることばです。

皆さんに聞きたいのですが、英語の while の用法についてどう感じていますか

(ラマー (学生))

基本的には同じだと思います。同時に起こっている2つのことがらがある時に使います。

(アルフォンソ)

問題はですね。日本語では while にあたる表現がたくさんあるということなんです。第1は、「あいだ」ですが、もっとちがった while もあるんです。まず、会話を聞いて下さい。

A：みんな食べるのが早いですね。

B：おそばは、熱いうちに食べなければおいしくないでしょう。

A：しかし、早いですね。あの人は、見てるうちに食べてしまいましたよ。ほら、あの人はしょっちゅう時計を見ながら食べていますよ。みんな、5分から10分のうちに、食べて出てしまいますよ。私の国では、ランチを食べている間、友達と話ながらゆっくり食べますよ。

B：すべて早くやるのが、この国の会社の習慣なんです。しかし今日のうちに終えてしまわなければならない仕事があるのかもしれないですね。やりかけの仕事がある内は休んでいるわけにはいかないんです。この国では、忙しいことはいいことなんです、喫茶店でもビジネスマン達は、コーヒーを飲みながら仕事の話をしています。

A：日本に来る度に、この国の人たちは、時計と競争をしているんじゃないかと思います。一日中、一年中、日本も時計も止まりませんね。なぜか分かりませんが、日本は他の国より、時計の数が多いですね。小学生も時計を持っていますよ。

B：日本は人が多くて、みんな一緒に動くんですから、さっさと走らなければ人混みにはまり込んでしまうんです。だから、タイミングが、非常に大切なんです。

アルフォンソ：時計を見ながら食べています。

コーヒーを飲みながら話をしています。

仕事の話をしています。

——英語説明——

(アルフォンソ)

今の会話の中に「うちに」、「ながら」ということばが何度もでてきましたね。それについ

て練習してみましょう。

(西原)

私が英語で while を含む表現を言います。それから日本語であとの部分を言いますから、二つの部分を組み合わせてみて下さい。

西原室長： While it was still dark, 加藤さんは家から出ました。

A： 加藤さんは、暗いうちに家を出ました。

西原室長： While walking to the station, 「あっ、今日は大切な会議がある。」と思いだしました。

B： 駅へ歩いて行くうちに、今日は大切な会議があると思いだしました。

西原室長： Before I forget, ノートに時間と場所を書いておきましょう。

C： 忘れないうちに、ノートに、時間と場所を書いておきましょう。

——英語説明——

(アルフォンソ)

仮定の表現に「たら」があります。その他「ば」もあります。じつは「ば」はもう何回かできていますね。「高ければ」「なければ」など、もう知っていますね。

この表を見て下さい。「ば」をつけた言い方の例が書いてあります。

食べる → 食べれば

行 く → 行けば

あ る → あれば

The Face of Japan

(西原)

尺八という楽器は、ジョン・ネプチューン氏に感謝しなければなりません。なぜなら、ネプチューン氏によって今まで出たことのないような音色を出すことができるようになったからです。ネプチューン氏は尺八によって、日本の伝統的な音楽のほか、ジャズ音楽のような現代的な音楽もつくっているのです。まず、伝統的な音楽の方から聞いてみましょう。

西原部長： この尺八の続きをお見せ出来ないのが、実は残念なんです、この方は、ただ変な外人が尺八を吹いているという事ではなく、尺八というのは、日本の楽器ではない、世界の楽器の中の一つとして、自分がピックアップして専門にしているのであって、外国人でプロの尺八奏者、それでご飯を食べている人というのは、あんまりいないんじゃないかと思うんですけども、それを持ってジャズとかブルースとかと、他の西洋楽器と合奏しながら、世界中をまわっているという、そんなお話がこれから続きまして、尺八は日本の楽器ではないと言いきるようなことは、ロケに伺った時に、日本人のスタッフにとってもかなりショックなことでありまして、そういうところが、ザ・フェイス・オブ・ジャパンの第二部の、単に桜と富士ではないというところで働いているいろんな方のご紹介という様なことが、続くわけです。

それはそれと致しまして、今のご覧下さって、いくつかの事が問題点としてすぐに浮かぶ

でしょうし、また特徴としてすぐにご覧になれば分かると思います。先ず、日本語教育の手段としてどういう事が特徴的なのかということと申し上げ、それから通信教育として、放送大学の日本語がどういうふうに成り立っているか、ということをして、2、3申し上げた後、少しその考慮すべき問題点ということに触れて、10分程で私の話を終わりたいと思います。先ず、下手な英語をお聞かせして、本当に恥ずかしいんですけども、媒介言語があって、それが英語であること、というのが、日本語教育の手段としての、大きな特徴と言えると思います。これもアルフォンソ先生のパーソナリティーということの一つでありますけれども、意図的にネイティブ・スピーカーでない人の、アルフォンソ先生もスペイン人でいらっしゃるし、私も当然日本人ですから、それなりの英語しかしゃべれないということになるわけですけども、英語を、国際語の一つとしての、リングフランカとしての英語ということを使おうという意図で、素敵なきれいな英語ということを意図せずに、いろんな英語があって、国際語としての英語が成り立っているのであるから、その事実を使おうということで、いろんな英語が聞こえてくることになっております。その結果、マイナスのポイントということも当然あるということは、覚悟して作り始めたものです。

それから、第2は、これもすぐお気づきになることですけども、教室での講義の形態を取っていることです。その結果として、これは放送大学の講義だということもありまして、日本語の構造を知的に理解させるということが少なくとも映像部分での主たる目的ということになっています。これはエレメンタリィ・ジャパニーズとか初級ジャパニーズとか言っていないことの一つの理由でありまして、日本という環境の中にいる人を学習者として想定しておりますから、当然、日本語を過去に、聞いたことがない人なんていないわけですし、色々な語学校、それから母国において習ったことのない人も余り居ないのではないかと。この頃やり直しの英語とかいうのはやっております、一度諦めたものを、もう一回やり直そうよ、ということがあるわけですけども、それと同じように、どこかで挫折してしまったものを、もう一度ピックアップする時に、ああ、自分はこういうことを習わされていたのかということをもっと頭の中にたたき込んでしまおう。それが知的な動機付けというふうになって、なるほど、なるほど、ということから始めよう。というような、そういう特色をもって、この番組が成り立っているということです。

第3番目の特徴と致しましては、これはアルフォンソ先生の事をご存じの方は一目瞭然、すぐ理解なさることだと思いますが、アルフォンソ先生は文法家でありまして、文法シラバスなんです、実は。但し、それをなるべく避けよう、そして文法はオブラートにくるんで、なるべく機能シラバスの如く見せようとか、機能シラバスに限りなく近づこうというようなことで、説明はあるものの、その説明があまり理論を先行させる形で成り立つようなことは避けよう、コミュニケーション・コンペタンスの開発という、これはアルフォンソ先生の用語なんですけれども、コミュニケーション・コンペタンス、能力というものを開発して応用力を養う。それを知的に理解することから始めようというような意図でシラバスが成り立っていることです。

それから4番目はモデル会話を今日御紹介があった他の二つの番組と比べてご覧になると、人が出て来ないということにお気づきだと思うんです。これも議論の結果、こういう事になったわけですし、プリントにも書いておきましたように、完璧な日本語を話す外国人学習者が獲

得できなかった事情もあり、これは当然録音されて、一週間に一度しかない映像の番組の合間にそれを何百回もモデルとして聞いておいてもらおう。あるいはポケットの中に入れて持ち歩いてもらおう。そのためには練習というのは耳から入ってくるものであっていいのではないかという事と、映像として見せるのであれば当然モデルとしては外国人の顔をした人が出てきて完璧な日本語を話しているということが、ふさわしいのだけれども、それが非常に難しい状態であったということもありまして、面白いイラストを伴って、そのイラストも、あまり音の邪魔にならないようイラストにしようということで、ああいう形のものが出来上がったということです。

それから5番目と、6番目は日本語教育の言葉の部分という事からは少し離れますけれども、日本事情をザ・フェイス・オブ・ジャパンという形で紹介する。これは外国にいる人にも見て貰えるかも知れないというようなこともあったとは思いますが、日本にいる外国人学習者であっても、こういう角度からは余り見たことがなかったんじゃないかというような日本というのをいくつか取り出して、15ずつですけれども、フェース・オブ・ジャパンということでまとめたわけで、それが日本事情の部分になります。

それから印刷教材ですけれども、この番組は講義として成り立って学習者は当然試験を受けたりするものですから印刷教材がございます。そこに映像で示されなかった練習その他がありますし、かなり膨大な量の練習、及び説明が付けておりまして、学習者は印刷教材を使って予習と復習を家でしなければならないというようなことを、番組の一番最初のところで伝えて印刷教材の活用というのを強く奨励しているということで、日本語教育の手段としての特徴というのがまとめられるのではないかと思います。

次に通信教育としての特徴ということで、そこに3点あげてありますが、これはさっきも申し上げましたように、コースとして取っているわけですから、もちろん見ているだけの人は沢山いると思いますけれども、ジャパニーズⅠ・Ⅱを受講する学習者には通信指導問題が、これは放送大学をとっている人には中間テストに当たるものはみんなこの形で渡されるわけですが、それと同じように、この番組の場合も通信指導問題が配布、郵送されて来まして、学習者は各自答案を返送して、担当講師の添削を貰って、それを参考にするという事になっております。

それから2番目に通信指導問題と同時に、同じ刷り込みの中に質問用紙というのが配布されてまして、学習者はそれに質問を書いて返送することによって答えを2つの方法で得ることが出来ます。一つは、まとめてテレビのある指定された時間内で答えるということもしておりますし、そうでない場合には、それが一番多いんですけれども、各自に手紙で答えて返送をするということをしております。

それから3番目のポイントですが、学期末には単位認定試験というのがございます。添削の制度上の問題もあって通信指導問題には聴解は入っておりませんが、単位認定試験の場合には聴解問題も含めた試験を致しますので、学習者は家でやるというわけにはまいりません。学習センターという所に行って期末試験に当たるものを受けるということになっています。

それで、最後に考慮すべき問題点ということで、これもすぐにお気づきになることだと思いますが、印刷教材と講義の映像ということで放送大学の日本語が成り立っておりますので、そ

れ以上の副教材というのは自分で録画、あるいは録音して、それを自分なりに副教材にするということの他にはないわけですね。もう少し学習者との交流というものがないと、本当は語学番組としては完璧でないのではないかという問題点が残されているように思います。どういふふう練習して貰っているのか分からないということで、学習者の顔が見えてこないという、そういうこともあります。

それから2番組なのですが、これも未解決の問題としまして、文字教育は映像では一切提示されていないんです。これは40分という番組の性質上、そこで漢字を教えたりしてしまいますと、その他の事がどんどん減ってきて、そこまで出来ないという技術的な事情もあったと思いますし、番組作成上の時間の制約もございましたので、文字教育は番組で映像では一切しておりません。但し、学習者には分厚い印刷教材が配られまして、その印刷教材の中には文字が、どういふふう練習するかということも含めて提示されておまして、学習者はそれを自習する、自習の道具にそれを使うこともできるというようなことで、その問題を一応、回避しております。私の方からはだいたいそのようなことで、続いて福田ディレクターの方から制作側のお話しをして頂きます。

福田助教：番組制作を担当しましたディレクターの福田でございます。私はこちらの仕事に携わる前はNHKで教育番組の制作に携わっておりましたので、その延長の仕事になりますが、こちらで初めて日本語の教育番組の制作に直面しました。

今、ご覧頂いた『Japanese I・II』を手がける前年度にテレビで『日本語教授法』ラジオで『日本語』という日本語教育番組の制作にあたりました。それぞれ15本ずつ作ったわけですが、『日本語教授法』の方は日本語の教師を希望する実習生の視点にたって作られています。日本語教師を志す人のための日本語教育番組というのが狙いで日本語教授課程における様々な課題を提示していくというのが内容です。講師の国語研究所の田中望先生から、「ウォッチング」と「ダビンチの生涯」のようなものを作りたいという要請がありました。

これは何かと言いますと、「ダビンチの生涯」というのは、イタリア放送協会が制作し、NHKで放送したドラマ番組です。もう、何年前でしょうか、ドラマ仕立ての「ダビンチの生涯」の劇中に現代人の解説者が登場して、事件の背景なり、あるいは意義を語っていくというスタイルで構成されたユニークなドラマです。

そういう番組の形式と、それから、「ウォッチング」のように、自分で素材を自由に取り出して説明に必要なものを提示していくという形をやってみたいということでした。『日本語教授法』の講義をこの両者の形式を取り入れて展開したいというのが講師のねらいでした。そこでできるだけ多彩な国籍の外国人の生徒を数人お願いして、授業案の作成からモデル授業に至るプロセスを実習生の視点にたって追跡して行きます。全部ビデオでその部分は収録し、それをスタジオで講師が既に編集されたものを基にして講義を展開するという訳です。只、そのビデオ収録した部分には講師が適宜、進行過程の中に登場して、そのシーンの持つ意味を説明していくという形をとったものでした。これが、「ダビンチの生涯」の劇中に登場するという形式を取り入れ、併せて指導に必要な事例を随時とりだして提示して行くという「ウォッチング」の手法を取り入れた形式による番組の展開でした。

そういう新しい試みを取り入れた番組を作りまして、それからアルフォンソ先生を主任講師として、このジャパニーズⅠ・Ⅱというのを制作する機会を得たわけです。アルフォンソ先生が、主任講師に決まりまして、日本においでになったのは、まだ、オーストラリアに居られました昭和62年の6月だったと思いますが、放送教育開発センターの外国人研究員ということでおいでになりました。

そうして、その半年間、教材作成、あるいは番組作成のための様々な問題点をプロジェクトチームで検討しながら準備にかかりました。そして、一旦、オーストラリアにお戻りになりまして、63年の4月に来日され制作にかかったわけです。『Japanese』のⅠとⅡ合わせて30本の番組ですが、この番組では、アルフォンソ先生がいったいどういう事を考え、どういう意図で日本語教育を進めていくかというのを、できるだけディレクターとしては正確に把握しながら、それをどう表現するかということに、全力を注ぐということに取り組んでみました。アルフォンソ先生の講義のすすめ方と、番組に対するイメージをつかむことが番組制作を進める上の基本になる訳です。アルフォンソ先生のお話では生徒をスタジオに呼んで、マンツーマンの、向かい合いながら講義を進めたい、それでテーブル等は全然いりません、椅子で向かい合って、生徒と膝を突き合わせてやりたいということでした。Ⅰ・Ⅱ各6人の外国人学習者を人選するにあたって、アルフォンソ先生に面接して頂いて、その中からアルフォンソ先生がこの人ならばという方を選んで、そして毎回收録の時に幕張まで来て頂いて制作を進めた訳です。従って、44分の中身は全く同時進行で作られ、編集は行なっていません。アルフォンソ先生の授業展開の基本部分は決めますけれど、実際のやりとりはいわばアドリブの形で進むわけですね。従って、どういうふうに素材を提示していくかということも、ディレクターとしてはだいたい雰囲気を見ながら掴んでいくというような状態です。

番組の制作に入る前に試作を行いましたので、その結果改善した点について申し上げます。

第1点は内容（情報量）が多すぎるということです。当初1回の内容は三つのユニットと二つのカルチャースポットという日本紹介で組みたてられていました。これでは所定の時間に内容を収めるのは不可能であるということから、二つのユニットと一つの The Fase of Japan という構成に改めました。

第2点は文字によるパターン表示をテレビ的に簡略化したことです。

第3点は学習の基本となるダイアログをイメージに力点を置いたイラストで表現したことです。当初、1回の中で取り上げていく内容というのが大変多過ぎてですね、はみ出すくらいでした。とにかく44分じゃ収まらない内容で出来ておりました。しかも、大変なスピードで進むんですね。英語による日本語番組としては、英語のスピードが猛烈に速いということと、提示するパターンの内容表示が、ものすごく多い、これではテレビ画面で文字を読みとることが出来ません。それを実施段階では3分の1くらいに縮めて、アルフォンソ先生はちょっと残念だったようですが、テレビの制約上、これは無理に盛り込んでも見えませんので、了承して頂きました。その他カードにするとか、色々な方法を取りましてまとめてみました。

それから、ザ・フェイス・オブ・ジャパンについては先ほど西原先生がおっしゃったような形でまとめております。これは、そういう狙いで、このシリーズでは日本紹介については、日本人のものの考え方や行動にスポットをあてたということです。それから、いわゆるスキット

にあたるダイアログの内容をイラストで提示しました。これは、ダイアログについてはこれは実写で表現するのは非常に難しいと判断したからです。このダイアログにはアルフォンソ先生の、やはり、思想といえますか、考え方といえますか、そういうものが盛り込まれています。言葉だけのやりとりならできますが、ドラマ仕立てにしても、実写にしても、短期間の制作ではあまりうまく行かない。わざとらしいか不自然な映像になるおそれがあります。先生と相談して、ああいう形のイラスト、つまりリアルなイラストじゃなくて、できるだけイメージを盛り込んだもので表現してみました。このイラストは何人かの人に書いて貰いまして、そのいくつかの事例を見て頂いて、最終的には、こういう形で行きたいというアルフォンソ先生の考えるダイアログのイメージに合う映像にできるだけ近づけてこしらえたということです。イラストの枚数もかなりの枚数になるのですが、これは制作期間、ちょうど一年がかりの制作ですけれど、その中で30本の番組の素材を、人と、人のコミュニケーションを深めながら作って行ったということです。

アルフォンソ先生がダイアログで提示しようとしたことのなかに日本人のものの考え方や行動パターンの特色がよく表現されていると思います。やはり、私共ディレクターとしては、放送大学全般に言えますけれど、講師とディレクターの関係というのは、細かい具体的な点で一致するということは、なかなか難しい場合の方が多くて、時には非常にソゴをきたすということもありますけれど、アルフォンソ先生と初めてお付き合いしてみて、アルフォンソ先生という方は、何て言うのか、日本人以上に日本的といえますか、大変、日本理解の深い先生でした。しかも、初めてのテレビ制作ということですが、最初はちょっとアクシデントがありましたね。先生が、オーストラリアにお帰りになった時に自宅で腕を怪我されて、最初左腕は全然動かなかったのですが、暫く治療に通ったりして大変不自由で厳しい条件の中で制作に当たられて、その点非常にご苦労も多かったんじゃないかと思います。

今日、お見えになれなくて本当に残念ですけれど、そういう講師の、やはり、個性を生かしながらアルフォンソメソッドとよく言われるそうですが、私、実際にアルフォンソ先生の講義の展開を見ていると、やはり、ハートで伝えるというのか、アルフォンソ先生の個性が講義展開の中に、よく出ていると思います。放送大学の番組は4年間放送しまして、4年目になると若干改定して、或いは視点を変えてまた制作するというシステムになっておりますので、また、改訂版を作る時期が、あつという間に来ると思うんですけど、その時には、また新しい要素を盛り込んで制作してみたいと思っております。

加藤所長：どうも有難うございました。時間の進行から申しますと、このあと30分余りになってしまいましたが、今まで、三つの番組の制作に携われた方々からご発表と、その作品のご紹介もございました。簡単に申し上げますと、国際交流基金のヤンさんシリーズの方はどちらかといえば、パッケージ・メディアというのが主体であって、CATVに使われることもあるし、空中波で流されることもあるけれども、教材であると同時に素材でもあるわけですね。向こうでどういうふうに編集なさってもよろしいという、そうした性質を持っております。あとの2つはいずれも放送を前提として作られた番組であって、しかも、大学の正規の授業の科目の中に入っております。内容的にも非常に軽快なものから重厚なものにいたるまで、また、画面処

理にしましても、それぞれ個性のあるご発表だったと思います。限られた時間でございますので、できるだけ簡潔に、そして実のあるご討論をお願いしたいと思います。どなたからでもどうぞ。

石田：筑波大学の石田です。放送大学の方の日本語教育で、ちょっと、もう少し詳しく聞かせて頂けたらと思いましたが、リングフランカに対する、全体、リングフランカとしての英語に対する受講者の反応、それからどういう方々が受講してらして、特に国籍とか言語関係ですね、それと結果はどうであったか、ということをもう少し詳しく聞かせて頂けたら有難いと思います。理由は二つございます。一つは、今、色々な地方の自治体がボランティアの人達を対象とした日本語教育というのを始めております。そして、そういう日本語教育の教える側というのが、また教師としての余りトレーニングを受けてない一般の主婦の方々が当たっているんですけども、その方々がやっぱり地方の団体が、この放送大学の教材を使ったらどうかという意見が多いらしくて、この教材を使うことにしているという所がかなり多いんですね。そうしますと、こういう様な、そういう方々は、まだ教えること自体、日本語を教えること自体が余り得意でない上に、日本の日本語教育と、こういうアルフォンソ先生のヨーロッパ式の言語教育との差で、どうやって教えていいか解らない。それで質問がかなり来ております。ですから、今日その、この放送大学の日本語教育の意図ですね、アルフォンソ・メソッドは中心であるということを聞かせて頂いて大変有難かったと思います。それと、もう一つの理由はですね、昨年、イギリスで日本語のサマースクールがございまして、そこにいくつか日本に出ている視聴覚教材を持って行きました。その時にヤンさんと、それから衛星放送でお作りになった番組と、それから国立国語研究所が作った「基礎編30編」というのを持って参りました。

ちょっと、こういう所で、公の場で申し上げていいかどうか解らないんですけども、衛星放送の日本語教育をかなり私達は期待を持って、かなり苦労して持って参ったんですけども、3回目には学生が一人も来なくなりました。その主な理由は、まず英語がマイナス面で働いたということ。それから、もう一つは、かける時間に関して学ぶ量が少なすぎるということですね。

それで大変意外なことに一番評判が良かったのは、日本では大変評判の悪い、面白くないと言われている5分ものの国立国語研究所で作った教材でした。その理由は、そういう周りが英語で日本語の島のような環境でみんなが泊り込みでやった6週間のサマースクールだったものですから、日本語が沢山聞けるということが大きな原因だと思いますけど、

もう一つは、かける時間に比例して学ぶことが非常に多いということでした。それで、先ほど出ました、映像による日本語の文法というのが必要なんじゃないかということに私も大変賛成でございます。そういう意味で媒介語をどういうふうにするか。それから対象、要するに教師が付く場合と付かない場合とで、使い方は随分違うと思いますけれども、対象と、それからメディアの持つ特性と、それから作る手法ですね、そういうものをもう少し深く討論すべき時期に来てるのではないかと。特に海外での日本語教育の質がこの数年飛躍的に上がっております、それに大きな原因となっておりますのは、講師の質が非常に上がっているということですね、当然教材の作り方というのも変えなければいけないのではないかと。そういう感想を、ここ、1、

2年持っておりますので、もう少し詳しく英語のプラスとマイナスというのをお聞かせ頂ければ有難いと思います。

加藤所長：はい。ありがとうございました。最初のご質問は放送大学の教材について、これ、媒介語が英語であると、それについての反応はどうであるかというようなご質問のご主旨で、後半の方はそれに補足したご意見であるというふうに承りますが、これは西原さん福田さんの方からお答え下さいますか。

西原部長：はい。先ほど申し上げましたように、国際語としての英語を、たまたま一言語である日本語を説明する手段として使おうということです。それならば英語を母国とする人が説明するのではなくてもいいのではないかということで、一応の結論めいたものは得たというふうに申し上げました。その事に対する反応でございますが、放送大学の制作、試作の段階で、色々な英語があることは認めるけれども、例えば、ラテン系の英語は北欧系の人には解り難いのだとか、中国系の英語はイギリス系の人には、まあまあ慣れているから解るけれども、ラテン系の人には実は理解し難いのだというようなことがある。リングフランカとはいうものの、世界中の人がどんなタイプの英語でも理解できるということにはまだなっていないから、その点の制約というものはあるのではないかということは試作に携わった学生役の人からも、既に指摘されておりました。ですから、そここのところの問題というのは実はまだ未解決なのではないかと思えます。ちなみに、衛星放送で行われた日本語番組で、後付け調査というのをやっております。その結果、面白いことが判明致しました。一つはですね、イギリスで行った後付け調査の結果、これはアメリカ英語だから好ましくないという答えを貰いました。もしアメリカでやれば、これはアメリカ英語とは言えないというような答えがあるいは戻ってくるのではないかという気が致します。ですから媒介語を選ぶということの問題が1つ、それを英語にするとして、では、どの様な英語であれば一番多くの学習者の人に喜んでもらえるのかというような事は、実は、私共はまだ解決をしております。たまたまアルフォンソ先生がスペイン語を母国とする方だった、ああいう英語を話す方だったということで解決になってしまったということになると思えます。それから学習者の反応でございますが、添削問題をしておりまして、この英語は解り難いという反応よりは、むしろ英語国民でない人からの訴えというのがいくつかございました。

一つの典型的な例は、訴えではなく、日本人の学習者が期末試験の英語を読み違えて、とんでもない答えを書いてパスしなかったという、パスさせようにもできるような書き方をしてくれなかったということがございました。これは一つのデメリットでした。

それから中国人の学習者が切々たる訴えを答案用紙の裏に書いてきまして、外国人のための日本語番組というのは実は他に存在していないので、これが唯一のものだと思ってとった。英語だということは知っていたけれども、とにかく解りにくいし、教科書も読みにくい。それで放送大学はとにかく中国人向けのものを次に作って欲しい。中国語で書いた教科書というものを次に考えて欲しいという、各国語版に対する要求というのがございました。

それから、その反応のうちの成行きという事で合格率のことなのでしょうか、解りませんが、

これは去年の一学期は、ジャパニーズ I に関しては 159 名登録して、試験の日に現れたのが 44 名でした。そして、内、合格した人、つまり添削問題も含めて 60 点以上クリアした人が 38 名でした。159 人中、38 名ですから、約 25% 合格したということになります。試験の当日現れなかった理由が何人かの個人から直接に耳に入ってきたのですけれども、7 月末の期末試験の時はもう自分は夏休みをとって国に帰ってしまったとかですね、何らかの事情で、その時、日本にもう居なかったとか、そういうような話を 2、3 の個人から聞きました。試験は学習センターに行って、その日に受けなければならない。その時間帯が 1 時間と決まっておりますので、期末試験の時間帯に対する流動性というのが、あるいは考慮されるべきなのかも知れません。日本語の II についても一学期目はだいたい 25% の合格率でした。

加藤所長：どうぞ、福田さん、お続け下さい。

福田助教授：西原先生のお答えに付け加えることは何もございませんが、先程ちょっと指摘されたように教材研究といいますか、そういう日本語教材の制作の研究というのをもっとやるべきじゃないかというのは、全くおおせの通りだと思います。これは私も、何て言いますか、NHK に長く居ながら語学番組は担当致しませんでしたけれど、横で見えておまして、とにかく日本語学習が講座として、あるいは企画された事は残念ながら私が NHK を卒業するまで全くありません。従って今回、先程インターナショナルの三宅さんが言われたように、日本語の講座をようやく NHK も腰を上げて取り組む必要性を感じてきたと、こういう時代、情勢の変化というのを汲み取ってとりくむ必要があると思います。語学講座を軌道に乗せるまでには韓国語の講座や、中国語講座もそうですが、やはり色々政治的な問題、その他絡んでまいりたい日の目をみるのに 10 年くらいかかります。従って放送大学で比較的早くこの問題に直面して実際に作ってみたということが、ある意味ではそういう過程で、また改善していく一つの具体的な素材を提供したということも言えるんじゃないかと思うんですね。日本語学校へも何回か、たまたま番組制作に関連して行きましたけれど、指導者の問題、あるいは教材の問題を考えたら、全く、これは、背筋が寒くなるような状況だろうと思います。というのは、教材は殆ど自作で取り組んでますから、その苦労は大変だと思います。圧倒的に多い東南アジアから参加される日本語学習者に答えていくのに、まだまだ難しい課題を含んでいるなというのを痛感しております。今日の Japanese でも、例えば文字の問題は割愛してあります。日本語教育でまだまだやらなくてはいけない事が沢山あると思うんですが、当面、放送大学が取り組んだ初めての試みという事でご理解頂ければと思います。

加藤所長：ではどうぞ、祖父江さん。

祖父江：西原先生の方から大変良い番組を作って頂いて感謝しておりますけれども、ちょうど先程出ました、英語でやるのはどうかということの問題なんですが、私も英語でやるより他仕方なかったらと思うんですが、もう一つ、ただ、裏話を付け加えますと、私共放送大学で一番苦心致しましたのが、最初の時の試験の監督であります。それで、その時にはですね、多

分、これは日本語を話せなくて、だけど英語は解る人達が受けに来るだろうからというんで、監督は全部、英語をしゃべれる先生達ばかり動員されて行ったんですが、場所によりましてはですね、英語のしゃべれる先生が行ったんですけども、英語も全然解らない受験者が沢山いたということで、だいたいそれは西アジア及びフィリピンから来てる女性で英語は出来ない、タガログ語はできるという人が多かったんです。それで私の場合はですね、また放送大学のセンターが長野県の諏訪にありまして、そこでフィリピンの女性が一人受けるというんで、私の場合は前の晩から汽車に乗って泊り込んで朝、張り切って行きましたら、ついに現れなかった。それでおそらくその方もね、その方がわざわざお宅へ電話してみましたら、試験は諦めて仕事に出たということで、おそらく先程先生がおっしゃいました様なケースもありますし、それからフィリピン、西アジア、それから中国、そして英語も解らない、特にフィリピンの女性は、割合、各センターで色々会ったんですけども、英語が解らないのでギブアップしたという場合、それから試験は受けたけれども、何か、結局解らなかったという場合も随分あったんじゃないかと思いますが、ただ、じゃ、どうすれば良いかということになりますと、やはりこれは英語より他なくて、中国語といえ、確かに中国から来てる人は多いですけども、これは今後の問題ではないかと思います。

加藤所長：有難うございました。時間の関係もございます。なるべくご質問、簡潔におねがいいたします。

新井：上越教育大学の新井と言いますが、今の問題も大変関心があります。その言葉を英語でやるかどうか。しかし今日のテーマは映像による日本語教育と、映像というところにポイントがあるんじゃないかと思うんですね。その問題については佐久間さんがおっしゃったように思いますが、今の西原さん達のものについて、言葉を、どういう言葉を使うかということだけじゃなくて映像でやったということが、例えばラジオと、どう違うのかというその辺の事について西原先生に少し伺いたいなという気が致します。

加藤所長：はい。では西原先生。

西原部長：代理ですから勝手なことが言えるということもございまして、勝手に言わせて頂きますが。一つにはですね、内容が非常に高度なものも含むということがございました。今、ジャパニーズⅡの第5課を見て頂いて、かなり複雑な構文を網羅しているということがご覧頂けたんじゃないかと思いますが、更に14課くらいになりますとですね、28もの、しかも、「やはり」とか、「せめて」とかですね、非常に難しい副詞を28も一遍に教えちゃうというようなことを敢えて行っております。顔が見えないで、声だけが聞こえてきたら、これでどういう事になるのだろうかという私共の素朴な疑問がございまして、知的に理解させるのであれば声だけ聞こえてくれば良いのではないかということも実は咳かかれていたと思うのですけれども、アルフォンソさんという、あのキャラクターの顔を見ながら納得させられるといたしますか、そういう事にしないと、これだけの内容を30回でたたき込むのは無理なのではないかということでご

ございました。

そして、たたき込むということですが、易しくしようと思えば幾らでも易しくできたと思うのですけれども、大学の講義であるという事と、制作時に会議に出ている方の一致した意見として、知的な日本語をとにかくこれだけ知的にたたき込まれたという記憶だけは残してあげたい。テイク・オフ・ポイントという言葉は私共好んで使いますが、英語国民ということをお願いしたい想定すると、アメリカ国務省の、外国語習得にかかる時間のリストなんかを見ましても一番沢山費やす時間が多いし、そしてテイク・オフ・ポイントというのは、飛行機が飛び上がる地点ということですが、先生の手を離れて自由に泳げるように、日本語だけで泳げるようになる時間というのが日本語の場合は非常に遅いわけですね。その遅いのを何時までも易しくしておくが無期限に引き延ばすことになる。だから、あのアルフォンソ先生の魅力ある話術と、それから、何かの映像の助けを借りて2学期で少なくとも、まあまあ言いたいことが言えるというようになるまでの説明を強引にやっつけてしまおうという、そういうことで、ラジオでなく顔を見ながら納得させようという結論が出たわけです。

加藤所長：今のご質問、大変大事だと思いますので、ちょっと補足させていただきます。アルフォンソさん以外の講師で、あまり表情のない人間がテレビに出たとしたら、テレビよりラジオの方が良かったという、それくらいパーソナリティというのは重要なファクターになりますか。

西原部長：はい。なるのではないのでしょうか。只、国によって色々パーソナリティに対する要望というのも違うのではないかと思います。例えば、三宅さんがご紹介下さいました、中国での先生ですね、あそこにアルフォンソ先生の顔が現れたら、多分中国では軽過ぎるという評価を得たのではないかなと思いますけれども。

加藤所長：そうですね、ついででございますから三宅さん、佐久間さん、ちょっと今の問題についてご意見がありましたらどうぞ。

三宅理事：NHKの語学講座の担当者に、実は今度こういう所で私、話をする事になったので、何も知らないと思し訳ないと思ひまして、語学講座のベテランに聞いて参りました。当然の事ながら解説をなさるインストラクターの先生の選定ということにですね、NHKの語学講座の場合には大変意を用いてですね、その先生が、親しみ深いとか、非常にお話の仕方が流暢だとか、そういった事を非常に重視して選んでいるとは言っておりました。

ただし、ご覧になって、全部の語学講座がそうなっているかどうか、それはまた別の問題だと思いますが、私は只、流暢だとか、それから、逆の意味で流暢ではないが学識が非常に深いとか、そのどっちが大事なのかという問題ではなくて、やはりどんなにお話が上手でも駄目だと思いますし、どんなに、しかし学識が深くてもやはり駄目な面があると思うんです。学習をする人がテレビで、やはり、この画面を見るわけですので、その見ている生徒さん、あるいは学習者がですね、その先生に画面を通して対面することによって、非常に刺激されるとか、ま

た来週も見たいと思うとか、そういったことは非常に重要だと思うんです。

教室の授業は先生の授業が嫌だから、先生の顔が気に入らないから逃げだそうと思っても逃げ出せませんが、テレビの場合は少なくとも幾らでも逃げ出せるわけですから、そういう意味で、やはり映像を通じて与えられる印象というのは非常に大事にしなければならないと私は思っています。ただし、それは流暢だとか、顔が良いとか、そういった事とは全く別の問題で、その方の人柄だとか、その方の持っている雰囲気だとか、そういったものではないかというふうに私は思っております。これは只、そういう番組を作ったことがないので極めて批評的な言い方で申し訳ないと思います。

加藤所長：佐久間さん何かコメントございましょうか。

佐久間助教授：教師のですね、カリスマ性みたいなものが外国語学習に限らず大事だということとはわかるんですけども、ヤンさんのシリーズの場合には、ごらんになっておわかりのように、教師の役割というのは、あまり大きくありません。教師はあまりしゃべらない。その代わりに、ヤンさんというスキットをできるだけ多く見せるようにしています。そして、スタジオで行うミニスキットは、多少誇張があったり、ふざけていたりするもので、その時に学ぶ日本語が視覚的・象徴的にわかるような、やや極端なものを持って来ようとしています。自然さを目指したヤンのスキットとの組合せでバランスをとることをねらい、教師はなるべくしゃべらないで、テレビというメディアの特性を活かそうというアプローチです。ただ、それが本当に成功したかどうかは、我々も初めてやったことですので、自信がありません。ただ、私、外語大におりますので、NHKの語学番組の講師を務めた先生と話をすることがあるんです。ある先生は、非常に正直に、「僕はNHKでやった時に、どうも何かね、何とか語講読とか、何とか語学みたいな講義をしちゃったんだよね、そしたら手紙がたくさん来てね、評判悪くて早く辞めたよ。」というようなことをおっしゃいました。直接関係があるわけではありませんが、やはりテレビ番組というのは、視覚に訴えるというメディアの特性をもっと活かさなければいけないだろうということが、出発点にあったことは確かです。それから、ただ、こちらのお二人の、今、お話しにあったのは、放送大学という、大学の、単位に換算される教育内容というものを提示しなければいけないという制約があると思います。そういうことから考えますと、あちらに大変分厚い教科書があります。きちっとした体系的な教科書があるんですね。それに比べまして、ヤンさんのシリーズは、いい加減なといいますか、ここにありますように、非常に薄っぺらくて、何か遊びの本、何か勉強するっていう雰囲気じゃないようなテキストになっているんです。ですから、ねらいが全然違うということが、逆に我々の場合には、映像をフルに使って楽しい番組を作り、興味を持って見てもらえればそれでいい、という何か気楽なアプローチを許しているように思うんです。目的の違いは大きいと思います。

加藤所長：有難うございます。それでは次の方どうぞ。

佐藤：東洋女子短期大学の佐藤です。と申しますよりも九州大学で日本語補講を2年間致しておりました。ですから、教師として、その教材をどう見るかという方で拝見させて頂きました。先ほど西原先生、福田先生の取り上げられた放送大学の方の教材で媒介が英語であったということで色々ご質問出ておりましたが、初級の一番最初の学生に教える場合に、どうしても私共九州大学では英語圏ではない学生が多ございまして、それも漢字圏じゃない学生もございまして、色々検討した結果、やはり日本語の基礎Ⅰ・Ⅱという教材がどうしても手軽だったわけですね、

教える側からいうと、それは何故かという、英語だけではなくて中国語、韓国語あるいはインドネシア語、スペイン語まで確かございましたね。色々な媒介語で教材の方に説明が出ていて、練習もある。ですから、教師が殆ど日本語だけで後は物を見せるとか、それを提示することで説明している。最初ローマ字を使いますが、それでも家に帰った時に自習する母国語の教材があったということですね。

ですから、今度は三宅先生が、今日、ご紹介なさった教材、例えばモンゴル族の人とか、カイ族の人が見た場合にも、そのカイ族やモンゴル族の言葉で書いた教材があれば説明の所は中国語であっても使えるのではないかと思いますし、ですから映像媒体とそれから文字媒体をうまく利用するという事は課題だと存じます。

それから申し訳ありません、ちょっと話が移りますが、三宅先生の方にご質問させて頂きます。実はNHKの紹介で確か一度、番組紹介か何かの時でも、この教材を拝見しまして、おや、と思ったんですけども、ちょっと地味じゃありませんか、地味なということで出てくるのが赤いドレスなんですよ、映像と、その言語と音声とが一致しないと、我々は、おや、と思うんですが、これは中国文化では赤は地味なんでしょうか、確かおめでたい時に赤だったような気がするんですが。それから確かに中国で、今、学生がとにかく殆どしゃべれない学生でも学研の新しい日本語の中国語訳の現代日語を持って来て書き込みまして最後のページまでやってるんですね。ですから、中国での日本語学習者が非常に増えているのは解るんですけど、それにしても1課の中での、その語彙とか文型とか盛り沢山過ぎて、あれを本当にやろうとしたら消化不良になるんじゃないとか、教える側からいうと、あれ全部はとて教えられると思うんですけど。例えば、専門店とか、バーゲンとかいろいろな言葉が出て参りました。ですから、学習対象はどれくらいのところを狙っていて、最終的にいうと27課までいくわけですね。その文型の最後は何処まで教えてらっしゃるのか、ちょっとご教授願いたいんですが。ですから、媒介語としての文字媒介と映像媒体の関係と、それから三宅先生の中国での学習状況、2点お願いします。

加藤所長：第1点はどなたに。

佐藤：三宅先生でも、西原先生でも、福田先生でも、佐久間先生でもどなたでも結構です。

加藤所長：はい。第2点は三宅さんですね。じゃ、簡単な方からいきましょう。

三宅理事：そうですね、あの辺は演出家が、やはり、沢山ある中で地味なの派手なのと選んでやってるので、あの中ではあれが地味と思ったんじゃないかと思います。特段、赤が派手ではないとかですね、赤が地味だとか、そういう中国の文化的な事とは直接関係ないと思います。たまたま、それはそういう演出家の意図であったらうということしか私には解りません。

加藤所長：先程は28だったですね。一番最終的には。

三宅理事：文型の最後はですね、私、余りその辺のところを直接担当者と打ち合せしておりませんが、これですね、これが第80課、一番最後、中国のほうのスタジオで作った台本を実は貰ってきてるんですが、それが言わば、第1学年の総まとめなんですね。それで、ここに出てきている文型はですね、総復習ですから解り難かったんだらうというところを復習してるんだらうと思いますけれども、「何々そう」、「落ちそう」だとか、「柿が落ちそう」だとか、何とかを見ると、「美味しそう」だとか、これは「写真に撮れそう」だとか、そういった文型について、この最後のところではやっておりますね、それから、「何とかをしていないようだ」とか、「何とかだそうですね」という、こういうのが1年生の第1学年の一番最後になっております。只、どういうところで、どの文型が発展してきて、そうになっているかというのは、ちょっと私、専門家じゃありませんのでよく解りません。

加藤所長：はい。どうぞ。

西原部長：ちなみに放送大学ではそれで15課目で1冊目が終わります。2冊目はそれ以降から始まります。15課でそれだけ叩きこんじゃうということになります。

三宅理事：難し過ぎるんじゃないかというのは、中国のほうではですね、先ほど充分説明しませんでしたけど、放送、CCTVという一般の放送でやっている、そちらの方が非常に詰め込みが厳しくてですね、初級というのにかなり難しい、それに比べると放送大学のほうの出来上がった番組を中国の人達が見たわけですが、これはそれ程でもないな、という感想を述べておりました。

加藤所長：どうぞ、これが最後のコメントになるかと思いますが。

江口：広島大学の江口と申しますが、大変興味深く映像と、それからご説明をお聞きしております、ふっと私、拝見しながら思ったことは、私共が英語を学び始めた頃というのはリングフォンというレコードのSP盤がございまして、それを聞きながら英語を勉強したという記憶を、今、思い出してたところなんですけれども、それで、今日の日本語の教育の教材を拝見しながら感じます事は、やはり映像の強みというものをヒシヒシと感じまして、私共がそういう映像を伴った英語を学んでいたら、もう少し違った英語の力がついたかなというような気がしているんですけども。それに関してちょっと伺いたいことございますのは、映像だけにですね、

これはやっぱり文字情報のそれと違うものが随分沢山入ってくるなということ、私はショックを受けるくらいに見ておったんですけども。それは、つまり、日本人のライフ・スタイルというものがそこに歴然と出て来るということですね。ということは、また逆に言いますと、どういう、その場面構成というか、どういう番組をそこへ選択するかということが日本人というものを日本語と同時に紹介する上で非常に重要な意味をもって来るような感じを受けました。

例えば、3つ目の、西原先生のご説明の中にもあったと思うんですが、時計と日本人が出てきた、あれなんか非常に面白くて思わず、私、笑っちゃったんですけども、ああいうところに日本人のライフ・スタイルあるいは現代人のライフ・スタイルといったものがユーモラスに描かれている。そういった点はまた一方では非常に面白いし、良いと思いますが、今度は最初の佐久間先生のご説明の中に出てきた、最初、何か田園調布とかというお話しでしたね。それからだんだん墨田川の方に行くとかいうようなお話しでしたが、そういう場面を選ぶということの重要性を私なりに何となく感じるわけですが、ライフ・スタイルというものをですね。それを日本語番組をお作りになる側ではどういう基準で、どんなふうな考え方で、ああいう場面を選んでらっしゃるのか。それを選択するにあたっての基準、あるいは日本文化についての考え方と言いますかね、そういう事はどういうふうに語学番組の編成においてお考えになっているのか、そこを非常に私、関心を持ちましたので、最後にお尋ねさせていただきます。

加藤所長：大変重要な問題のご提起でございまして、私なりにパラフレイズさせて頂くと、この種の番組の企画ないしは制作にあたって、言語とそれから文化と、その二つをどういうふうに折り混ぜていったらよろしいのか、あるいは、どのようにお考えになっているかと、そういう問題です。大変だいなご質問なので、佐久間さんから順々に簡潔に一言ずつお考えをお述べて頂いて、このセッションを終えたいと思います。

佐久間助教授：ヤンさんシリーズの場合ですね、下町の方に、貧乏で、マイナスのイメージを持っているわけではなくて、実は私は隅田川の近くで育った人間で、個人的には下町に愛着を持っているんですが、「ヤンさん」の前半では、舞台として山の手が選ばれました。ですから、後半の13話は、下町を舞台にすることで、バランスをとったとも言えるかと思います。映像で東京なり、日本の紹介をするというようなことを考えた時に、バランスがやはり大変難しいということは初めからありまして、多くの場合、語学番組用のミニスキットという素材は、非常に短いんですね。短く撮るということは、何かたくさんある中から一つを選ぶということですから、価値判断が強く求められます。それを我々は、悪く言えば逃げようじゃないかと、その代わりに、普通の語学番組で使われているスキットよりはるかに長いものにして、十分な文脈をですね、与えようと考えたわけです。

その場合、特に外国に出すためにいうことはあまり考えずに、日本人が見てもちょっと我慢すれば見られるような普通のテレビドラマのように作ろうじゃないかというアプローチです。ですから、あまり外国人を意識しないということがですね、制作側にあったということを申し上げておいたほうがいいと思うんです。

わざわざ日本的な日本を外国人にお見せするということがじゃなくて、できるだけありのまま

の日本をですね、大きな文脈の中で与えることを優先させたわけです。例えば、さきほどの中国の例で見ますと、あの買物の場面というものが、その前がどうだったのか、その後はどうなるのかということがわからない。これは、また別のアプローチです。ヤンさんシリーズの場合は、思いきり長く見せようじゃないか。その中で目で見ればだいたいストーリーがわかる中から、ある部分をピックアップして、そこで言葉を学んでもらおうじゃないかと。

ですから、欧米などでヤンさんが使われた時に、我々が最初に意図したことは多少ずれるんですけども、たとえば、最初から加藤さんの家では奥さんがお茶を入れるんです。お皿を洗うんです。それから大家さんの家のおばあさんが出てくるんですけども、やはりおばあさんがお茶を出す。職場に行くと、今度はいつも岡田さんという女性がお茶を出す、コーヒーを出す。それは、後編の13話に行っても変わりません。研究所へ行っても、いつも井上さんという女性がお茶を出し、男はいつもくつろいで待っている。そういうようなところをですね、外国人が見ますと、これはスコットランドの高等学校での話なんですけれども、どうして日本の男の人はいつもお茶を待ってるんだ、何もしないんだ、どうしていつも奥さんだけが、女の人だけがコーヒー入れたり食器を洗ったりするんだというような意見が出てくる。その時に、現場の先生方が求められた質問は、これは現実の日本か、誇張されているのか、ということでした。その時に、たまたま日本の生活のある、その先生は、うん、まあ、これは特に誇張されているとは思わない。こんなふうには新聞を読んで、ご飯が出来るのを待っている男の人は、まだ日本にはたくさんいるような気がするというコメントをしたということなんですけれども、我々は、日本の家庭の中での男の役割、女の役割を特に誇張して示そうという意図は実はなかったんですけども、普通のテレビドラマのように撮ったら結果的にこうなったということです。

実はこの監督は、「スチュワーデス物語」などをお作りになっている瀬川さんという方で、こういう多少明るい、多少コメディータッチな撮り方をなさる方なんですけれども、このような点についてはそんなに誇張した作りをしているとは思いません。文化的にも、それから取り上げる社会文化的な事項というものも、一応、その枠は作りましたけれども、そういうものを押し付けてですね、これこそ日本だというような肩を張ったような形では作らないというのが基本的な方針でした。

加藤所長：有難うございました。では三宅さんどうぞ。

三宅理事：はい。頭の回転が悪いので、上手にまとめられるかどうか解りませんが、中国の放送大学で一年間使われますあの番組は、先程第10課をご覧いたわけですが、だいたい登場人物も、そう沢山色んな人が出て来るわけではなくて、中国から日本へ若い人が留学をして来た場合に、その人達が体験するであろうという生活範囲ですね、そういったものを中心に27課全体が組み立てられておりますから、全部一回一回違った形で出てくるわけではありませんで、通して学習することによって、もし中国の学生さんが日本へ留学したら出会うであろう生活がですね、だいたいその中に盛り込まれているという形で、言わば日本の生活文化というのをですね、切り取っているというつもりでございます。

ついこの間、こちらの加藤先生にもご参加頂いて、NHKで日本語教育の今後のテレビの展

開についてお話し合いをしたことがあるんですが、その時に加藤先生から色々なお話しを聞かせて頂いたんですが、大変印象に残っているのがですね、一つには外国人に日本語を教えるわけだから、是非、日本語は難しいという、一種の恐怖心みたいなものをですね、うまく取り去ることのできる語学講座というか、テレビ講座であって欲しいという事が1点と、それから2番目には、先ほどのご質問と非常に関係しているわけですが、日本語教授、日本語の学習をしながら日本の文化そのものが理解できていくというようなものである必要が、やはり映像による日本語教育の場合には大変期待されるんじゃないかというお話しがございました。

では、その日本の文化というのは何だろうか、どういう文化を知らせるんだろうかという話になりましてですね、外務省のほうからご出席頂いていた委員の先生はですね、やはり、日本について外国人がよく持つ俳句ですとか、柔道ですとか、浮世絵ですとか、そういったことも、やはり興味の対象としてとらえられるようなものになっていく必要があるんじゃないかというふうにおっしゃり、逆に今度は神戸製鋼という会社がございまして、その会長さんがやはり出席されておりまして、いや、そうではないと。向こう三軒両隣りというか、そのいう中にある日本の生活文化、そっちの方が大事なんだと。そういうものが解るように是非NHKさんはして欲しいと、こういうようなお話し。これはまあ、両方うまく取り入れてですね、やっていくということはなかなか難しいと思うので、NHKもやがて苦勞するんじゃないかと思っておりますが、そういったことを一生懸命話し合ってくださいね、あるいは討論し合ってくださいね、というのが一番、やっぱり放送というような非常に多くの人達を相手にするものの場合にですね、何処がいわば着地点なのかということをごこれから研究していかなくちゃいけないと思っております。

そういう意味で、やはり一番最有力というか、先鞭を付けてうまくおやりになっているのは、映像の世界では先ず、やはり「ヤンさん」の先程見せて頂いたのがですね、やはり一番面白いし、引き付ける力を持っているし、日本の通常の生活文化といいますか、いわゆるカルチャーというようなものもですね、一番理解できると思っております。ただ、あれから先に、まだ進まなければならない分野がおそらくあるだろうと思うので、その辺のところをこれから研究できればな、というふうに思っております。

加藤所長：はい。それでは最後になりますけれども、放送大学チームにおねがいします。

西原部長：ザ・フェイス・オブ・ジャパンについては福田さんにお答え頂くとして、そうではない方の、番組中に付随してしまう文化の事で、アルフォンソ先生がかねがね言ってらっしゃる事ですが、アルフォンソ先生が、この番組ではなく、高校生向けの日本語教科書というのをオーストラリアでお作りになった時、常々おっしゃってた事は、日本語が国際語になるためには、何処へその言葉を移植しても、その国の文化を日本語で語れるというものでなければならない、国際語になるための日本語の条件はそこにあるということです。ですからオーストラリアで編まれた高校生のための日本語の教科書には、オーストラリア若者文化というのがたっぷり出てくるわけですね。

放送大学でも、その哲学には殆ど変更はなかったということで、今ご指摘頂いたように人間の心が語ればモデル教材として、とても成功したと思おうじゃないかということです。今日

のはまだ短い方でして、3分も続くモデル会話というのがあるんですね。その中でアルフォンソ先生、および制作側が文明とは何か、人間とは何か、愛情って何だというようなことを何時も何時も問いかけます。さっきも聞いていて意図が解るとおっしゃって下さったんで、非常に嬉しかったんですけども、急ぐってどういうことなんだ、私達は止まって何か考えた方がいいんじゃないかとか、それから、ロボットのように働かされていて、これでいいのかとか、子供を良い学校に入れてどうするんだとか、日本人が教育、教育と言っているのは何なんだというようなことが何時も問いかけられているような、そういう人の心を映すものとしての文化というのが、そのイラストを伴ったモデル教材での私達の問いかけということになっていると思います。ザ・フェイス・オブ・ジャパンはもう少し意図的に、いわゆる外側でも見えるような文化というものに着目しているんですけども。

福田助教：ちょっと、それでは付け加えます。やはり、ご意見に出たようにですね、日本を紹介するということはどういうことなのか、映像で日本の生活、あるいは日本人の考え方を伝えるのは一体どういうことなのかというのは、単に語学教育ということじゃなくて日本人の実際の生活やものの考え方と表裏一体のものでありますから、大変難しいと思うんですが、アルフォンソ先生が提起された、このジャパニーズ教材の中での会話事例、その他を見ますと、例えば、私達が思ったのは、例えばお正月であるとか、初詣であるとかですね、あるいは、いわゆる日本的な年中行事の素材なんか活用できるのかと思っていましたら、全く違います、そういうものを通して日本の生活の一端、あるいは文化の一端を伝えるというようなことではなくて、今、西原先生がおっしゃったように生きるとはどういうことなのか、あるいは生と死の問題と、ということが会話の軸になっています。ある情景描写をやるにはドラマ的な手段をとって映像化しても、その説得力のあるものを作るのは大変難しいやりとりです。

従って、このやりとりを実写、あるいはドラマの形で提示するのは見送って、むしろイメージをふんだんに提示できるようなイラストの方が良いのではないかと考えた訳です。イラストをああいいう形までもって来るまでには、ものすごく手間暇がかかったということが言えると思います。

そして、全体の中ではだいたい5分くらいの時間ですが、ザ・フェイス・オブ・ジャパンという形で狙ったものはⅠの方で狙ったものと、Ⅱの方で狙ったものとはちょっと違っておりますが。Ⅰの方では例えば、漢字文化圏としての日本の日常見られる情景を手掛かりにという程度の事から、何て言いますか、大学生のアルバイトの実状であるとか、そういうようなことをスナップ的に色々組み合わせることによって、日本人の生活の一端を示しています。それからⅡの方ではできるだけ、そういう日本文化、あるいは国際交流に関わった人の目から見た日本の現状などを、その方のお話しを通して日本人の政治、経済、文化の一端を伝えようじゃないかという意図で考えたわけで、機会がありましたら、その点はまた色々検討をして取り組みたいと思います。

加藤所長：有難うございました。まだご質問沢山あると思いますが、時間がなくなりましたので、この辺で一応打ち切りにしなければいけません。最後に一言、私なりの考えを述べさせて

頂きますと、先ほどからリングフランカの問題が出てます。媒介語の問題ですが、つい3週間ほど前に放送大学の比嘉教授から伺って、ああ、そういう事情があったのか、初めて知ったんですが、皆さんご存じのようにリチャーズという学者がおります。言語学者でオグデンと一緒に「意味の意味」という本を書いた人ですけれども、確か1944年とか45年とかいってましたけれども、チャーチルがハーバード大学で講演をした事があるそうです。その時に第二次大戦後の世界というようなことが話題に出ます。その時リチャーズがいて、そしてベーシック・イングリッシュというのを考えていた。これは850の単語によってつくられたものなのですがこのベーシック・イングリッシュのテキストを、全部、絵入りでつくってるんですね。媒介語を全然使わないで、絵と文字だけで母国語が何処であるかは問わない。

たまたま、それとほぼ平行しまして、日本では東北大学の土井光知先生が基礎日本語というのをお作りになった。あれは五百何十語だったか、1,000語だったか忘れちゃったけれども、基礎日本語という書物、皆さんご存じだと思います。しかもその基礎日本語だけで「基礎日本語」という立派な本をお書きになった。我々が普段使っております語彙がだいたい7,000とか8,000とか申しますけれども、今、野本菊雄先生が簡約日本語というのに挑戦しておられる、としますと、我々自身の日本語も簡約化されることができそうですし、媒介語を通じる事なく相手方の国籍、性別、年齢のいかに問わず伝えられる日本語教授法というものもあるのではなからうかなということを、皆様のお話しを伺いながら考えました。簡単な私見をそえて、閉会とさせていただきます。どうも有難うございました。

** 以上をもちまして、昨日、朝から始まりまして、この大会の全てのプログラムが終了致しました。色々なプログラムがございまして、自由研究発表、また特別な課題研究、そして今回の、この「映像による日本語教育」のシンポジウム、私も伺っておりまして大変日本語教育の大変な事と、また、それを何とかして実現して、多くの色んな国の方々に日本語を普及させていこうという、その皆様の熱意を感じることができました。今回の、この大会につきましては、この放送教育開発センターの所長の加藤秀俊先生をはじめとして、このセンターの方々、また間接には放送大学の先生方にもお世話になった事と思います。今、改めてご参加の方々と共に、この会場を提供され、更に今日のような、良いプログラムを発展、展開して下さいました加藤先生はじめとする、スタッフの方々に厚くお礼を申し上げます。どうも有難うございました。先生方もどうもありがとうございました。これをもちまして今回の大会を終了致します。ありがとうございました。